

はじめに

「女性の社会進出」、「少子化」、最近このような言葉をよく耳にするようになった。不況が長引く中、依然として就職難も続いており、一方では女性の社会進出が謳われているにもかかわらず、女性の就職は特に厳しい現状にある。私自身就職活動を経験し、女性の就職の難しさを痛いほど実感することとなった。女性の雇用率や、女性の育児休業取得率の高い会社はそれを売りに会社のPRをし、質疑応答では決まって女の子は「育児休業は取れますか？」と質問をする。どうしてこんな当然のことが、会社の売りになるのだろうか、なぜ、女の子だけがこのような質問をしなければならないのだろうか。私は就職活動中何度も繰り返されるこの光景にうんざりさせられた。これまでの学生生活では性別にかかわらず男も女も同じように教育を受けてきており、特に女性が男性より能力が劣っているとはどうしても考え難い。それに適材適所という観点から見ても、性別の区別をしないほうが、才能や能力のある人が不当に抑圧されること無く働くことができ、企業にとっても、個人にとっても得られるものが大きいのではないだろうか。それにもかかわらず女性の就職が厳しいのは、世間に根強く残っている性別役割分業観と、女性が子供を生むことで一時的に働けない期間が生じることに理由があるのではないかと考えられる。しかし、仕事をしたい女性にとって、子供を産むことで女性だけが働けなくなり、そのことで社会から敬遠され、男性は子供ができてでも飄々と働き続けることができるなんて、まったくおかしなことである。

また、少子化が進行する原因の一つに出生率の低下が挙げられるが、この出生率の低下の理由には「晩婚化」、「子供の養育費など経済的問題」、「仕事と子育ての両立の難しさ」などが主なものとしてあげられており、これらの理由をながめていて、私はある疑問を感じた。それは、自ら子供を持たないことを選択した人よりも、子供は欲しいが仕方なく子供を持たないことを選択したという人たちのほうが圧倒的に多いのだということである。つまり、少子化の原因は個人の意識の問題というよりも、むしろ社会全体の体質にあり、それが今なお根強く残っている「男は外、女は内」という性別役割分業観ではないだろうかということに気がついたのである。それならば、この性別役割分業をなくし、男も家事・育児をし女も外で働くことが普通に行われる社会を目指すことで、経済的問題も仕事と子育ての両立も解消でき、少なくとも子供を持ちたいと望む人たちの出生率の低下を緩和することができるのではないだろうか。

しかし現状を見てみると、性別役割分業観がまだまだ根強く、たとえ女性が社会に出たとしても、男性と対等に働けるほど女性を助けてくれるような強い効力を持つ法律や制度もない。その上、女性の社会進出は徐々に進行しつつあるにもかかわらず、男性の家庭への進出は一向に進行しないままである。これでは「男は外、女は内」どころか「男は外、女は外と内」という最悪な事態に近づきつつあり、女性は大変な苦勞を抱えて生きていかなければならなくなってしまうのである。私はこのような矛盾に対し疑問を持つようになり、この問題のキーポイントは、性別役割分業を打ち破ろうとする女性に対し、頑固に性別役割分業を守り続け、一向に家庭へ進行しようとする男性にあるのではないかと考えるようになった。「もし男性がもっと家事・育児をしてくれたら、女性の負担は軽減され、性別役割分業観も和らぎ、女性の社会進出はさらに加速し、少子化を緩和させることにもつながっていくのではないか」こんな思いから、私は男性の家事・育児についてもっと知りたいと思うようになったのである。

ジェンダーに関しては、どちらかというとなりに関して語られることが多いように感じる。性別役割分業や社会進出など、ジェンダーによって不利な立場にあるのは女性であることが多いからだろうが、その影には家事・育児をしたいと望んでいる男性の苦しみもあるのではないだろう

か。就職活動で女の子が決まっていたあの質問をもし男の子がしていたら、「法律で決まっている範囲のことはありますので」と企業側は女の子と同じ反応をさせていただこうか。むしろ、社会進出を望む女性よりも、家事・育児を望む男性に対してのほうが、世間の風当たりは強いのではないだろうか。本研究では、そんな厳しい現実の中で、まだまだ少数しかいないが、性別役割分業を打ち破り、家事・育児に積極的に取り組んでいる男性たちの家事・育児の実態とその意識を明らかにすることで、彼らのような生き方を支持する人々が少しでも増えてくれることを願っている。

第1章 研究目的および調査方法

第1節 研究目的

これまで、ジェンダー研究やフェミニズム研究の中で、性別役割分業が語られるとき、「男性の育児」が取り上げられることはしばしばあったが、それらはいずれも世間一般の意見を対象に調査を行ったものが多かった。1992年に育児休業法が施行され、男も女も育児のために休暇を取得できるようになったにもかかわらず、現代日本ではまだまだ、仕事の時間を削ってまで家事・育児をしようという男性は、ごくわずかしかないといえる。しかし、それがごくわずかであるからこそ、彼らの新しい生き方—家事・育児の男女共同責任—を取り上げる必要があると思われる。

本研究ではこの点に注目し、前半で世間一般を対象にした男性の家事・育児の現状を簡単に紹介した上で、後半ではこれまで取り上げられることが少なかった、積極的に家事・育児に参加する夫のいる家庭の、家事・育児の特徴を明らかにしていく。その際、夫の家事・育児の裏には妻の家事・育児も存在することを忘れてはならない。そこで、本研究では、彼らが夫婦でどのようにして家事・育児を分担・共同しているのか、そして夫婦がお互いに自分たちの新しい分業のスタイルに対して、どのような考えや思いを抱いているのかということ、インタビューによる夫婦の語りから捉えることで、夫が家事・育児に積極的に参加する家庭の全体的な家事・育児を明らかにすることを目的とする。

第2節 調査方法

本研究では、主に「男も女も育児時間を！連絡会（以下育時連と表記）」を対象者としたアンケート、およびインタビューにより収集した2種類のデータについて分析を行った。ただし、第2章については、育時連家事プロジェクトが2003年1月に行った、『男は忙しいから家事できない??』の調査報告をもとに分析したものである。

(1)対象者の選定

先でも述べたように、現代日本では、夫が積極的に家事・育児に参加している家庭そのものの母数が非常に少ない。そのうえ、彼らは夫婦共働きで子育てをしているという、非常に忙しい人たちであり、その少ない母数の中から、さらに本研究に協力してくれる対象者を探すのは容易なことではなかった。まず、以前からホームページなどでこのテーマについて勉強させてもらっていた、家事・育児をする男性をたくさんメンバーに持つ育時連という組織とコンタクトをとった。そして、育時連が月一回開いている例会に、9月20日に飛び込み参加し、そこで簡単に本研究の概要を説明したレジュメを配り、調査方法や対象者の集め方について相談にのっていただいた。その結果、当初はメール送信による自由記述方式のアンケートのみを夫婦ペアで15組ほど行い、

データを集める予定だったが、対象者を 15 組も集めるのは不可能だということが分かった。そこで、予定を変更し、対象者の人数を減らして、自由記述方式のアンケートに加えて、対面インタビューも行うこととした。そして、対象者の条件として、(1)現在 0 歳から小学校へ入学するまでの子供がいて、リアルタイムで乳幼児の育児に直面している夫婦、(2)育児時間やフレックスタイム、育児休業など、夫が少なくとも何らかの制度的なものを利用して、育児に積極的に取り組んでいる夫婦、という二つのものをあげ、これらを満たす夫婦を対象者として育時連のメーリングリストで募ってもらった。また、9 月の例会に同じく偶然飛び込みで参加していた、東京大学の大学院生の男性も対象者集めに協力してくれることになり、友人や知り合いをあたってくれた。しかし、それでも対象者が数人しか集まらなかったため、さらに条件を広げ、(1)の条件は、かつて子供が 0 歳から小学校へ入学する以前に、家事・育児に積極的に取り組んでいた夫のいる夫婦に、回想法により当時を思い出しながら語ってもらうものでも良いとし、(2)の条件は取っ払い、明らかに一般の男性より積極的に家事・育児に参加していれば制度的なものを利用していなくても良いものとした。

その結果、現在子育て中の夫婦 5 組と、かつて子育てしていた夫婦 1 組が集まった。ここからは、育時連や東大院生の男性に間に入ってもらうことなく、直接私と対象者のメールでのやりとりとなったが、現在子育て中の 1 組とかつて子育て中の 1 組については、夫婦のどちらか片方のみの協力となってしまった。したがって、最終的には、アンケートおよびインタビューの両方に協力してくれた現在子育て中の夫婦 3 組（以下ケース 1～ケース 3 とする）計 6 人、アンケートのみに協力してくれた現在子育て中の夫婦 1 組(以下ケース 4)と夫のみ(以下ケース 5)、かつて子育てしていた夫婦の妻のみ(以下ケース 6)の計 4 人、総計 10 人が集まった。対象者の人数としては不十分であると思われたが、対面インタビューにより得られたデータが、予想以上に内容の濃いものであったため、結果的に十分なデータを確保することができたといえる。なお、ケース 1 からケース 6 の詳細なプロフィールは、第 3 章の冒頭で紹介する。

(2)アンケートおよびインタビューの実施要領

まず、調査の第 1 段階としてアンケート調査を実施した。アンケートは全て自由記述方式とし、各設問に対して字数制限なしに対象者に好きなだけ考えを記入してもらうという方法をとった。また、アンケートをやりとりする媒体としてメールを採用し、それぞれの対象者から指定されたアドレスにメールでアンケートを送信し、約 2 週間の期限を設けて、こちらが指定するアドレスに回答済みのアンケートを返送してもらった。アンケートには「夫用」と「妻用」の二種類を用意し、必ずそれぞれに夫と妻本人が回答することを条件とし、夫側の意見と妻側の意見を単独に聞きだせるものとした。アンケートの設問内容は概ね以下の通りである。

- ・ 家族構成とそれぞれの年齢
- ・ 家事・育児の分担・共同状況
- ・ 自分の得意な家事・育児と苦手な家事・育児
- ・ 自分の考える夫婦の家事・育児分担の割合(%)
- ・ 夫が家事・育児をするようになったきっかけ
- ・ 夫婦ふたりで家事・育児をすることで良かったことと悪かったこと
- ・ 家事・育児に抱えている悩み

- ・ お互いの家事・育児に対する評価（100点満点で採点）
- ・ 今後の希望
- ・ 自分自身のこと（就業形態や通勤時間など・・・）

次に、調査の第2段階として、現在子育て中の夫婦3組に対して対面インタビューを実施した。3ケースとも事前にメールで日程や場所について相談したのち、仕事が休みとなる土日に、対象者宅にてインタビューを行った。事前に実施したアンケートでは、夫婦別々に回答してもらうという方法をとったが、対面インタビューでは逆に、夫婦ふたり同時に話を聞くことにより、夫婦の会話のやりとりもみていくという方法を採用した。したがって、インタビューは主な調査者の私に加え補佐をしてくれる調査者1人と対象者夫婦の2対2で行われた。但し、11月中旬にインタビューを実施したケース1はビデオ係も含め3人で訪問し、11月下旬に実施したケース2は土日にかけて宿泊でインタビューを行い、会話の中に夫婦以外に子供が発言している箇所もある。インタビューは全て1時間から1時間半くらいのもので、ICレコーダーで録音すると共に、その様子をビデオで録画した。インタビューの質問内容は、事前のアンケートの回答結果に基づきあらかじめ作成しておいたが、3ケースとも質問内容が同じであったわけではないので、ここでは共通して質問した一部のものだけ下に紹介することとする。なお、共通した質問といえども、対象者に自由に語ってもらうという形式をとったため、これらの質問は話の展開により、全く同じ言葉で、全く同じ順序でなされたものではないことを付記しておく。

<分担の決定>

- ・ 家事・育児分担は、どのようにして決められたのですか？
- ・ 休日の家事・育児の様子を教えてください。
- ・ お互いにできない家事はありますか？
- ・ きっかけから現在までの家事・育児分担の経緯を教えてください。
- ・ 仕事と家事・育児の両立のコツは何ですか？

<影響と評価>

- ・ お互いに家事・育児で気になっていることはありますか？
- ・ 喧嘩は少ないですか？
- ・ お互いが抱えている悩みについて知っていましたか？

<ジェンダー関連>

- ・ 家事・育児は自分の仕事として認識していますか？
- ・ もし、妻が専業主婦だったら？
- ・ もし、夫が仕事人間だったら？
- ・ もし、次に選べるならどんな生活？
- ・ 家事・育児への向き不向きは性別の違いだと感じますか？

(3) トランスクリプトデータの作成

インタビューに際しては、ICレコーダーによる録音と、ビデオによる録画により記録した。これらの会話データを全て文字に起こし、トランスクリプトデータを作成した。その際、対象者が夫婦であり、インタビュー内容についても非常にプライベートなものであるため、会話の中ししばしば家族成員の名前が登場したので、それらは全て仮名で表現した。

これらのデータについて第3章から分析を行っているが、トランスクリプトデータの引用部分

は一回り小さな字で表し、それぞれの引用部分の最後に対象者をケース 1 からケース 3 で記した。また、会話中に（カッコ）が出てくる箇所があるが、それは実際にそこで発言されたわけではないが、補足しないと会話の流れがつかめない場合に、調査者が内容を補足したものである。そして主な調査者である私を「A」、補佐の調査者を「B」と表し、それぞれのケースで夫は「夫」、妻は「妻」と表した。また、ケース 2 において子供が登場した場合、長女を「子 1」次女を「子 2」と表した。なお、ケース 1 からケース 3 において「A」は全てに共通して私であるのに対し、「B」は全てのケースで別の人であることに注意しなければならない。

第 2 章 育時連の紹介と日本男性の家事・育児の現状

本研究で取り扱うのは、1 章でも述べたとおり、家事・育児責任を夫婦二人で担っている、日本でもまだ少数派に当たる人たちの質的なデータである。データがこのようにある一部分だけに特別に視野を向けたミクロなものであるので、第 3 章からの分析をより分かりやすく深いものにするために、この章では、分析に入る前に知っておいていただきたい 2 つのことについて説明する。まず第 1 節では私がこの研究をするためには欠かせない存在となった育時連という組織について簡単に紹介し、続く第 2 節では育時連の家事プロジェクトで行った調査報告をもとに、量的なデータより世間一般の家事・育児の現状についてマクロな視点から触れていく。

第 1 節 育時連の紹介

本研究を行うにあたって、育時連の協力は必要不可欠なものであった。私が「父親の育児」というものに関心を持つようになったきっかけから、すでに育時連との関わりは始まっており、その後、調査方法の相談から対象者の紹介、そして実際のアンケートおよびインタビュー調査の対象者として、というように本研究の全てが育時連の協力の下に成り立っている。

そこで、本研究の鍵となるこの育時連という組織について、ここで説明しておこう。この節では、育時連という組織が一体どのようなものなのか、また、どのような活動や取り組みを行っているところなのかをみていくことを通して、育時連という組織を紹介していく。

(1) 育時連とは？

正式名称は「男も女も育児時間を！連絡会」。元々は、「男も女も育児時間を認めて」と社会に要求していこうという趣旨で、1980 年 6 月に発足した組織である。その略称が「育児連」ではなく「育時連」であることから分かるように、その目的は子育てについて研究することではなく、育児する時間をどうやって作るのか、会社での仕事と育児の時間をどうシェアするのか、男と女とかに限定しないでそれぞれの親が育児に関わる時間をどうやって確保するのか、このような問題に対し常に取り組み、考え続けることである。

育時連のメンバー基準はきわめて曖昧で、「男らしさ」「女らしさ」に居心地の悪さを感じ、職場や家庭での性別役割分業に「そんなのイヤだ」「うっとおしいね」と言える軽さと、それを通す強さとしたたかさを、と思っている人は立派な育時連のメンバーであり、その気持ちが理解できる人も立派な育時連のメンバーであるとしている。参加方法も様々で、例会に参加したり、いくじれんニュースを購読したり、いくじれんホームページを読んだり、メーリングリストに登録したり、手紙や E-mail で意見を出したり、情報提供をしたり、議論を仕掛けたり、講演会を企画して育時連を呼んだり、というように多様な形がある。また、育時連には代表もいない。経費も

会費制ではなく任意カンパ方式をとっている。

つまり、男だろうが、女だろうが、一人暮らしだろうが、家族を持っていようが、子供がいようがいなかろうが、かけがえのない自分の時間を大切にしたいという一点で集まり、互いの立場を尊重しあう、そんな場所が育時連なのである。

(2)育時連の活動

毎月1回九段社会教育会館で、情報交換・ニュースの内容検討・イベントの企画などを行う月例会を開いている。また、年に1回合宿も行っている。メーデーには、毎年参加者に育時連のビラを配布したり、時々シンポジウムを開き、世に問いかけている。1985年4月からは、「いくじれんニュース」を隔月発行し、活動をメンバーに報告している。現在この「いくじれんニュース」は季刊となっている。この他、育時連ではこれまでの様々な活動内容を本にまとめ2冊出版しており、さらに、育時連メンバー個人による本も多数出版されている。雑誌社・TVからの取材、各地の生涯教育講座等での講演、原稿の依頼などで結構多忙なメンバーもあり、95年度からは、東京都の子供の環境整備を審議する諮問委員に育時連のメンバーが任命されている。最近のものを言えば、2003年6月に厚生労働省と育時連との間で個人としての立場での意見交換会が行われたり、このあと2節で詳しく説明するが、2003年1月には育時連家事プロジェクトで、男性の家事・育児を考える「男は忙しいから家事できない?」という調査が行われた。またこれを受けて、8月と10月に育時連ワークショップが開催された。

(3)育時連メンバーによる職場での取り組み

育時連では「男も女も育児時間を！」というスローガンの下、育児のための時間を取得するため、様々な取り組みを行ってきた。仕事もしながら育児の時間を持つためには、職場への影響は避けて通れないが、育時連のメンバーたちがどのようにして、仕事と育児を両立してきたのか、いくつかの例を、育児休業法施行前後に分けて紹介したいと思う。

1) 育児休業法施行（1992）以前

まず一つ目は、育児時間ストライキ方式。育児時間を認めない会社に対して、保育園の送り迎えを理由に堂々と遅刻・早退を繰り返し、単なる遅刻・早退とする会社に対して「指名ストライキ」であると労働組合から支援してもらい、4年間続けたことで、男性の育児時間を認めてもらうことができたという例。

二つ目は、年休分割方式。子供の保育園へのお迎えのために、年休を15分単位で取って早退するという方法である。4年と9ヶ月もの間この生活を続け、最初の一年間は1時間、二年目は45分、三年目は30分・・・やがて年休が足りなくなって欠勤扱いとなり、結果として、賃金カットと定期昇格停止のペナルティーという痛い思いをしたという例。

三つ目は、単なる遅刻。時間は刻々と過ぎるのに、駄々をこねてなかなか保育園へ行こうとしない子供。結局、私事の育児で仕事に遅刻して毎日恥ずかしい思いをしたという例。

四つ目は、人寄せパンダ。会社に育児休職を認めてもらう代わりに、会社の進歩的人事制度の宣伝要員として新聞、雑誌、TVに引っ張り出されるのにひたすら耐え忍び、おまけにたった2ヶ月の育児休職で本まで書いたという例。

2) 育児休業法施行（1992）以降

一つ目は、申請してみても損はない！という例。フルタイムの共働きで、三歳の息子を持つこの

男性は、毎日息子の保育園への送迎のため遅刻ばかりしていて、このままでは職場に迷惑をかけたばなしで申し訳ないと、育児のための時間短縮を認めてくださいとの陳情書を会社に提出・交渉したところ、2週間後にOKが出て、一日一時間半の育児時間を取得することができた。

二つ目は、夫婦でフレックスタイムを上手に活用するという例。早起きの夫が7時半には会社のデスクに入り、夕方4時に退社して子供を保育園へ迎えに行き、5時には帰宅してゆっくり風呂に入り夕食を作る。逆に妻は、朝子供を保育園へ送り届け、フレックスで遅れて出社し、その分遅くまで働いて帰宅するという方法で、賃金カットもなく、効率よく仕事と育児の両立をしている。

三つ目は、定時に帰る管理職の例。フルタイムの共働きであるため、管理職でありながら、定時に退社し娘を保育園へ迎えに行き、夕食の支度をしながら妻の帰りを待つ生活をしている。もちろん昇進を諦めたわけではない。

このように、育時連のメンバー達の取り組みを見ていても、やはり仕事と育児の両立は、どちらも完璧にこなそうとすることは非常に困難であることが分かる。しかし、どちらか片方を切り捨ててしまってよいものでもない。仕事と育児の両立は、どちらも完璧にこなそうとすることよりも、両者をどう上手くやりくりしながらこなしていくか、ということにかかっているように思われる。そしてそのためには、会社側の理解ある態度と、育児休業法（1992）の施行が、非常に重要な鍵を握っているのもであるということが、上述の例の育児休業法施行前後を比較することでよく分かる。育児休業法施行以前には、育児のために仕事に支障をきたすことで、多くの場合メンバー達は何らかの不利益を被っている。例えば賃金カットや欠勤扱い、定期昇格停止のペナルティー、時には会社のための人寄せパンダになったり、また、たとえ会社から直接制裁が無くとも、上司や同僚から陰口を言われたり苛めにあったりと、まるで育児をすることが悪いことであるかのようにである。しかし、育児休業法施行後の例では、少なくとも育児をすることで会社側から何か制裁を受けたり、苛めにあったりということは無くなったようである。

しかし、何度も言うようだが、いくら育児休業法が施行されたからといって、仕事と育児が両方とも完璧にこなせるようになったわけではない。重要なのは、育時連のメンバー達もそうであるように、育児休業法をいかに自分たちのライフスタイルに合わせて、もっとも有効な形で上手く活用することができるか、ここに仕事と育児の両立のポイントがあるのである。

また、不思議なことに、育児休業法以前に様々な取り組みをしたメンバー達は、自分に何らかの不利益があったにもかかわらず、皆口々に「賃金カットよりも豊かな暮らしのほのかな手応えを主張」したり、「保育園の子供たち、母親たち、園のスタッフとの交流が自分を支えてくれました」「思い悩むより、子供に向き合ったほうが人生にプラスになるし、想像もつかない違った世界が見えてくる」「人の足を引っ張っても、誰かが何かしてくれるのを待っていても、ハッピーにはなれないんだから」「子供が初めて歩いた、その一歩を見ることができて感動でした」などと言っており、自分が育児に参加したことを肯定的に捉え、不利益はあったけれどそれよりも大きな何かを得たのだということを主張しており、誰一人育児に取り組んだことを後悔してはいない。むしろ、自分のためにもなったし、新しい世界を発見することができ、育児は自分にとって良い体験であったのだと語っている。特に男性においては、昔から家庭のことは女性に任せっきりでずっと未知の世界であったため、その壁を破り一歩を踏み出すということ自体が、まず勇気のいることであったからか、育児を通して得た感動は女性よりも何倍も大きいように感じられる。そして、今までどうして家庭の中という世界を知らずに生きてきたのだろうか、今まだ家庭の中を知らないままに生きている男性たちは絶対に一度は体験してみるべきだ、と思う強い気持ちが伝わ

ってくる。

育児休業法を上手に活用し、仕事と育児を両立させることは、男性にとって新しい世界を知ることとなり、社会に出たい女性の助けとなり、企業の適材確保につながり、何より共働きの子供を持ちたい夫婦にとって、この上ないパワーとなるようだ。

第2節 日本の男性の家事・育児

本研究では、父親も家事・育児に積極的に関わり、夫婦で共に家事・育児に取り組んでいる家庭の、新しい分業の形をテーマに分析をしていくわけだが、その前に、一般的な日本の家庭では、どのように家事・育児が行われているのか、そして、世間の人々は家事・育児についてどのような考えを持っているのか、という日本の家事・育児の現状について触れておきたい。

ここでは、その日本の家事・育児の現状について、育時連家事プロジェクトで行った『男は忙しいから家事できない??』の調査報告をもとに説明していく。この調査は、1995年に福岡市で第1回目が行われ、それから8年経った2003年1月に第2回目が東京都小金井市で行われた。ここでは、最も新しいデータである2003年に東京都で行われた調査報告をもとに現状を説明していく。ただし、このデータは地域的な偏りがあり、日本全体を代表するものではなく、参考データであることを断っておきたい。

(1)日本の家事・育児の現状

まず、日本の有職者の1週間あたりの働く時間の変化を、1990年と2000年のデータから見ていきたいと思う。この10年の間に一体どのような変化があったのだろうか。

ここでは、NHKとジェトロのデータを引用する。1990年のデータ(表1)はジェトロのもので、女性はフルタイムワーカーのみのデータであり、2000年のデータ(表2)はNHKの「NHK国民生活時間調査」もので、女性はフルタイムとパートタイムの両方を含む。また、このNHKの調査は5年おきに行われていて、1990年のジェトロの表(表1)の中の日本のデータは1990年の「NHK国民生活時間調査」をもとに作られたものである。

		職業労働	家事労働	合計 (時間/週)
男 性	日 本	57.7	4.0	61.7
	米 国	47.5	14.1	61.6
	フランス	44.9	16.5	61.4
	英 国	43.4	13.0	56.4
女 性	日 本	47.7	26.7	74.4
	米 国	36.3	25.8	62.1
	フランス	40.1	27.7	67.8
	英 国	40.1	18.9	59.0

「欧州主要国の婦人労働環境の動向とその経済的影響について」ジェトロ 1993

女性は、フルタイムワーカーの場合

＜ 表 2：1 週間あたりの、はたらく時間 （2000 年） ＞			
	職業労働	家事労働	合計（時間／週）
男性有職者	52.7	4.1	56.8
女性有職者	37.3	24.2	61.5

「日本人の生活時間・2000 NHK 国民生活時間調査」NHK 放送文化研究所 2000

女性は、フルタイム・パートタイムの両方を含む

まず、表 1 より欧米主要国と日本を比較してみると、日本では男性女性共に職業労働時間が他の国に比べて長いことが分かる。しかし、男性に注目してみると、1 週間の働く時間の合計は他の国とほとんど差はない。これはどういうことかということ、家事労働時間を見てみると分かります。日本男性の家事労働時間は 4.0 時間と他の国の男性の 3 分の 1 から 4 分の 1 しかなく、非常に短いため、労働時間を合計すると他の国の男性と差がなかったのである。では、女性はどういうと、家事労働時間は、他の国の女性と比較してもそんなに差はない。しかし、労働時間の合計を見てみると、74.4 時間と他の国の女性に比べて約 10 時間も多いいではないか。つまり、日本の男性は職業労働時間が長い分、家事労働をほとんどしていないが、日本の女性は職業労働時間も一番長い上に家事労働も他の国の女性と同じだけこなしているということなのである。労働時間の合計のデータを見てもらうとよく分かると思うが、男性・女性に関係なく全ての中で一番働いているのは日本の女性なのである。日本のフルタイムワーカーの女性は非常に大きな負担を抱えているといえる。もちろんこれは、日本の男性の家事労働時間が少ないことが原因の一つに挙げられるだろう。

次に、表 1 と表 2 を比較して、10 年の間に労働時間はどう変化したのかを見ていきたいと思う。まず、男性の職業労働時間が減ってきているのが分かる。しかし、家事労働時間はというと 0.1 時間増加しただけである。これは一日に換算すると 1 分も増加していないことになる。つまり、日本男性は職業労働時間が減ったけれども、家事時間はほとんど変化せず、結果として合計労働時間が減少しただけということが言える。では女性はどういうと、表 1 のデータはフルタイムワーカーのみのデータなので、純粋に労働時間を比較することは難しいが、パートタイマーを含めても家事時間が表 2 で減少しているということは、男性の家事時間が変化しなかったということから考えると、家事自体にかかる時間の総数が減少したことになる。これはおそらく、家事の機械化が進んだり、外注してやってもらうなど、いかに効率よく家事をするかという技術が発達してきたからではないかと考えられる。

この結果から、もっとも注目しなければならない重要な点は、日本男性はたとえ職業労働時間が減ったとしても、家事労働時間が増えるわけではないということである。

(2)なぜ、日本男性は家事をしないのか

日本男性の家事労働時間が短いことは前項より分かったが、なぜ、日本の男性は家事をしないのだろうか。一般的に、なぜ男性が家事・育児をしないのかということについては、「男性は仕事で帰りが遅いから」「仕事で疲れているから」「男は仕事、女は家庭と考えているから」など、男は忙しいからという理由と、性別役割分業による理由がよく挙げられるが、前項でも述べたように、日本の男性はたとえ職業労働時間が短くなったとしても、家事労働時間が増えるわけではないのである。では、実際に夫婦の家事・育児の共有度を左右しているものは一体何なのだろうか。

育時連家事プロジェクトの調査によると、家事・育児の共有の実態については、家事は「ほと

んど妻がおこなっている」という割合が非常に高く、特に夕食づくりやトイレ掃除など負担の大きなものは「ほとんど妻」がやるという家庭が80%を超えている。育児についても、家事よりは「ほとんど妻」である割合は低かったものの、保育園への送迎や子供が病気になったときの世話など、負担が大きいものはやはり「ほとんど妻」である割合が高くなっている。このように、育時連の調査からも、やはり家事・育児の負担は妻に偏っているという結果がでていますが、中には家事・育児の共有度が高い家庭もあり、その共有度には家庭によるばらつきが大きいようである。

そこで、家事・育児の共有度の高かった家庭と低かった家庭では、一体何が違うのかということ、育時連では次のように分析している。

前項から問題にしている夫の労働時間と夫婦の家事共有度の関係については、その間に明確な関係はなく、それどころか、夫の収入や夫の学歴と家事共有度の間にも明確な関係は見られないという結果がでていいる。つまり、ここで「男は忙しいから家事ができない」訳ではないということが証明されたといえるであろう。ただ、育児の共有に関しては、夫の労働時間が短くなるほど共有度が上がるという傾向が見られ、これは「育児を自分のすべきことと考え、時間があればかかわろうという男性側のやる気を示している」のではないかと考えている。このことに加え、早く帰宅して家にいる時間が多い分、妻が家事をしている間に子供と関わるのは必然的に夫になるからということや、家事と違って育児は、子供がそこにいるという事実がある限り、やりたくなくてもやらざるを得ない状況があるから、家にいる時間が多いほど育児に関わることは多くなるなど、他にも様々な要因があると考えられる。

また、男性の性別役割規範と家事・育児共有度に関しては、一見関係があるかのような結果となったが、妻の就労形態別にみると関係が一貫していないことから、「性別役割規範の強い男性の妻は常勤従業員になりやすく、また常勤従業員の妻を持つ夫は性別役割規範が弱くなりやすいため、性別役割規範と共有度に関係があるように見える」のだとされており、男性の性別役割規範は家事・育児共有度に間接的に影響を与えていると分析している。

では、家事・育児共有度に最も影響を与えているものは何かというと、妻の就労形態・妻の就労時間・妻の収入・夫婦の収入格差であるという分析結果がでていいる。つまり、「妻が自営業主・常勤従業員のような、就労時間が長く、収入が多く、夫の収入との差が少ない働き方であるほど、共有度は上がる傾向」があるということである。さらに興味深い結果として、妻の年収が130万円以内の場合、また就労時間が短時間の場合、妻が働いていても家事・育児の共有度は専業主婦の場合と変わらないということも分かっている。

その他には、「妻の学歴が高く、子供がいないほうが家事共有度が上がる」、「夫が年下であるほうが、育児共有度が上がる」という分析結果がでていいる。家事共有度については、妻の学歴が高いほど常勤従業員である場合が多くなるため、また子供がいない場合は家庭での仕事が家事のみになるため、家事共有度は上がったのだと考えられる。そして育児共有度については、年下のほうが年上に対するより頼みやすい、悪く言えば強制しやすいことによる影響が考えられるであろう。

以上の育時連の報告から、日本の男性が家事・育児をしないのは、妻が専業主婦、またはパートタイマーであるからだということが分かった。少なくとも、フルタイムワーカーの妻を持つ男性は、家事・育児を共有する傾向にあるのだ。それにしても、日本男性の家事・育児時間が非常に短いということは、それだけ日本には専業主婦やパートタイマーの女性が多いということである。この問題を解決しなければ、日本の男性の家事・育児時間が増えることがないのであれば、欧米のレベルまで追いつくのはいつになってしまうのであろうか。

第3章 家事・育児の分担と共同

これまでは数量データによりマクロな視点から、一般的な日本の家事・育児の現状について考えてきたわけだが、この章からは「夫婦でする家事・育児」についてアンケート調査およびインタビュー調査で得られた質的データをもとに、本研究の核となるミクロな視点から、個別事例のより深い分析および考察をしていく。

第2章の第2節で明らかになったように、日本の男性の家事・育児参加は極めて低調なものであった。たとえ夫が家事・育児に参加していても、その多くは「手伝い」の域を超えるものには至っていない。しかし世の中には、まだごくわずかではあるが「手伝い」の域を超えて家事・育児に積極的に取り組んでいる男性もいるのである。しかし、それがごくわずかであるがゆえに、彼らの家事・育児の様子や生活スタイルなどはほとんど知られていない。本章では、そんな家事・育児に積極的に取り組む夫のいる家庭では、夫婦がどのように分担・共同して家事・育児に日々取り組んでいるのか、また家事・育児をやる人とやらない人の違いはどこにあるのかということについて、時間的な変化も含めて考えていく。

第1節 2人で家事・育児をする夫婦の特徴

この節では、家事・育児を妻だけでなく夫も分担・共同し、2人で共に家事・育児責任を担っている夫婦には、どんな特徴があるのかをアンケートおよびインタビュー調査の対象者のプロフィールから探っていきたい。第2章の第2節では、夫が家事・育児をするかしないかは妻の就労状況によるという結果が出たように、2人で家事・育児をする夫婦の特徴をつかむためには、夫だけに焦点を当てるのではなく、妻にも焦点を当てる必要が十分にあると考えられる。そこで、夫と妻の双方から特徴を見ていくため、今回アンケート調査およびインタビュー調査に協力していただいた、ケース1からケース3の3夫婦計6名と、アンケート調査のみに協力していただいたケース4からケース6の計4名（ケース4は夫婦データであるが、ケース5は夫のみ、ケース6は妻のみのデータである）のプロフィールを以下に紹介する。

<ケース1> 夫38歳、妻37歳、長女4歳の3人暮らし。夫婦別姓の事実婚である。

夫・・・常勤会社員（新聞記者）。毎日片道40分の道りを電車で通勤している。定時は10時半から6時半だが、平日は一日平均12時間ないし13時間も働いていて、遅いときには帰宅時間は夜中の2時3時である。勤務先には家事・育児や介護に利用できる制度はほとんど整っているが、利用したものはベビーシッター利用補助券のみである。その他自分なりの方法として、妻が急に子供の迎えに行けなくなった場合には、上司の理解を得て早退したり、有休を取って子供の看病をしながら在宅で仕事をしたりしている。

妻・・・常勤会社員（金属メーカー）。毎日片道15分の道りを自転車で通勤している。月に3回静岡の研究所への出張もある。定時は9時から5時半だが、平日は一日平均10時間働いている（9時から7時）。その他月4、5時間の持ち帰り残業もある。産休と育休を利用し、その他子供が病気になったりした緊急の場合には、フレックスタイム制度を利用して遅刻したり、半日休暇制度を利用して早退したりしている。

<ケース2> 夫37歳、妻35歳、長女8歳、長男6歳、次男6歳、次女6歳、

祖父72歳、祖母62歳の二世帯住居暮らし。

夫・・・常勤会社員（メーカー勤務）。毎日片道15分の道りをバイクで通勤している。平日は一日平均7時間45分働いており、子供の送り迎えはほぼ夫である自分がする。勤務先にある家事・育児のために利用できる制度は法で定められた最低限の制度のみで、その中から育児休暇を利用した。保育園や学童の役員もやっている。

妻・・・公務員(保育士)。毎日片道1時間弱の道のりを自転車と電車で通勤している。定時は8時半から5時だが、平日は一日平均9時間働いており、子供が今より小さかったときは一日90分の育児時間を取り9時から4時の7時間働いていた。その他産休、育休を利用し、時には仕事を持ち帰るなどして家事・育児をこなしている。

<ケース3> 夫31歳、妻30歳、長男0歳(9ヶ月)の三人暮らし。

夫・・・常勤会社員(コンピューター関係)。毎日片道15分の道のりを自転車と電車で通勤している。裁量労働制を採用している会社なので出勤時間・退社時間に規定はないが、大体朝9時半から夜は10時11時12時くらいまでの、平日一日平均12時間働いている。月に2,3回は帰りが2時ということもある。勤務先には裁量労働制のほか、有給休暇年20日やファミリーフレンドリー休暇年5日(有給)が制度としてある。妻や子供の体調が悪いときにはこれらの有休やファミリーフレンドリー休暇を利用して休んでいる。

妻・・・地方公務員。毎日片道1時間の道のりを電車で通勤している。今は一日90分の育児時間を利用しているので、9時45分から5時まで働いていて、平日一日平均すると7時間働いている。その他、産休、育休も利用した。

<ケース4> 夫31歳、妻32歳、長女1歳の三人暮らし。

夫・・・常勤会社員(トラック運転手)。通勤時間は片道15分。平日一日平均12時間働いている。勤務先に家事・育児のために利用できるどんな制度があるのかは全く知らないと言っている。そのため、利用したものも全くない。

妻・・・特別公務員(区議)。通勤時間は片道20分。平日は一日平均7時間働いている。家事・育児のために利用した制度は育休のみである。

<ケース5> 夫35歳、妻35歳、長男7歳、次男5歳、三男2歳の五人暮らし。

夫・・・先日までは公務員(保育士)だったが、現在は大学教員。通勤時間は片道10分。平日は一日平均8時間働いている。公務員だったときに育児休暇を利用した。

<ケース6> 現在は夫68歳、妻50歳、長女13歳だが、子育て当時は夫55歳、妻37歳、長女0歳だった。

妻・・・子育て当時は自営業。通勤時間は片道20分。自営業なので家事・育児のために利用できる制度としては特になかった。子供を産む前は平日一日平均12時間くらい働いていたが、産んでからは7,8時間になった。ちなみに夫は陶芸家である。

以上が本研究の調査対象者のプロフィールである。育時連家事プロジェクトの報告では、夫が家事・育児をする家庭の特徴として、「妻が常勤で働き応分の収入を得ていること」が挙げられていたが、このプロフィールを見ても、ケース5の妻の就労状況は不明であるが、それ以外の全てのケースにおいて、妻はフルタイムワーカーであり、おそらく応分の収入を得ているものと考えられる。また、今回の調査では調査目的以外のプライベートな質問についてはなるべく避けるようにしたため、学歴については質問しなかったが、ケース1とケース3については、紹介を受けたとき、または実際に面接したときに、その場の流れから最終学歴を知ることができた。その結果ケース1とケース3は夫婦共に国立大学卒ということが分かり、その他のケースにおいても公務員を職業とする人が多く、おそらくその人たちについては大卒であるという推測ができることから、今回の対象者においては夫婦共に非常に学歴が高いという特徴が挙げられる。

ここまででは、育時連家事プロジェクトの報告で挙げられた特徴とほぼ同じ結果となった。しかし、夫のプロフィールに注目してみるとどうだろうか。育時連家事プロジェクトの調査では「夫の就労形態と家事共有度には一定の関係はない」という結果が出ていたが、今回の対象者のプロフィールを見てみると、ケース1の夫は新聞記者、ケース3の夫は裁量労働制を取り入れているコン

ピューター会社勤務、ケース 4 の夫はトラック運転手、ケース 5 の夫は大学の先生、そしてケース 6 の夫は陶芸家というように、比較的時間に融通の利く職種の人が多いことに気がつく。もちろん、そのような人たちが対象者になってくれたという側面も否定できないが、育時連家事プロジェクトの調査では、主にアンケートによる量的データを分析したため、就労形態を知ることができたが、さらに細かく職種を知るところまではできなかった。そのため、夫が常勤会社員であることは分かったとしても、その人がどんな職種の仕事をしているのかまではつかめなかったのである。仮に、職種別に分けることが可能であったとすれば、もしかすると今回と同じような傾向が見られたのかもしれない。どちらにしても、本研究の対象者に関しては、夫が比較的時間に融通の利く職種に就いているという特徴が挙げられる。しかし、決して彼らの労働時間が短いわけではない。例えばケース 1 やケース 3 の夫のように、平日一日平均 12 時間ないし 13 時間も働いていて、遅いときには帰宅時間は夜中の 2 時 3 時であるという人もいるし、ケース 4 の夫も平日一日平均 12 時間も働いている。その他のケースにおいても、常勤で働いている人がほとんどで、労働時間が一般に比べて特に短いというわけではない。むしろ、一般的に見ても労働時間は長く、家に居られる時間が短いという人たちがほとんどである。つまり、夫が家事・育児をするかどうかは、夫の労働時間の長さや収入などの就業形態よりも、どんな職種に就き、どのような働き方をしているかということに影響を受けるのだということがいえる。したがって、ここでは家事・育児をする夫の特徴として、常勤で長時間労働であるが時間に比較的融通の利く仕事に就いているということがあげられる。しかし、これはプロフィールから読み取った一方向的な特徴であり、この裏には、もう一つ違った側面が隠れていると考えられる。それは、彼らが家事・育児をするために、働き方のほうを変えたのではないかということである。このことについては、プロフィールからだけでは読み取ることができないので、4 章で詳しく分析していくこととする。

また、育時連家事プロジェクトの調査では、「夫が年下のほうが育児共有度は高い」という結果が出ていたが、本研究の対象者を見てみると、ケース 1、ケース 2、ケース 6 では妻のほうが年下であるし、ケース 3 とケース 5 に関しては夫婦が同い年である。夫が年下であったのはケース 4 の 1 つのみであり、本研究の対象者に関しては、夫婦の年齢と夫の家事・育児共有度には一定の特徴は見られないと言える。

その他で一つ気になったのが、夫の通勤時間のほうが妻の通勤時間より短い場合が多いということである。ケース 1 を除き、ケース 2、ケース 3、ケース 4、ケース 6 についてはプロフィールからも夫の通勤時間が妻の通勤時間より短いことが分かる。そして、ケース 5 については妻に関する情報はないが、夫の通勤時間は片道 10 分と短いことから、妻の通勤時間より短いか、若しくはそうでないとしても自宅から勤務先までが近いということと言える。このことから、夫は労働時間が妻よりも長い分、通勤時間を短くすることで、家庭にいる時間を少しでも長くしようとしているのではないかと考えられる。つまり、家事・育児をする夫の特徴として、通勤時間が(妻より)短い傾向があるということが挙げられる。

ここで、本研究の対象者である 2 人で家事・育児を分担・共同している夫婦の特徴をまとめると次のようになる。

- ・ 妻がフルタイムワーカーであり応分の収入を得ている。
- ・ 夫婦が共に大卒以上であり、高学歴である。
- ・ 夫は長時間労働であるが、比較的時間に融通の利く仕事に就いている。
- ・ 夫の通勤時間が(妻より)短い。

以上のことが挙げられるが、本研究は量的データを基にしているわけではないので、この結果はあくまでも本研究の対象者の特徴であって、それ以上のものには成り得ない。従って、夫が家事・育児に積極的に参加し、夫婦2人で家事・育児を分担・共同している家庭の特徴が、この結果と同等のものになるとは限らない。ただ、一つの傾向として、夫婦で家事・育児に取り組む家庭には、このような特徴があるということを理解していただきたい。

この他にも、このプロフィールからだけでは読み取れなかった特徴は多々あると思われる。そういうものについては、インタビュー調査の結果からも後々述べていくものとする。

第2節 夫婦の家事・育児の分担・共同状況

夫が家事・育児を分担している家庭では、夫婦の家事・育児の分担状況はどのようになっているのだろうか、妻の分担の特徴や夫の分担の特徴といったものがあるのだろうか、また、彼らの家事・育児は一般の男性の家事・育児の現状と比較すると、何がどう違うのだろうか。この節では、自由記述方式で行ったアンケートの結果から、夫婦とする家事・育児の分担・共同状況を考察すると共に、インタビューの回答をもとにさらに細かく、分担・共同の様子を探っていく。

		家事	育児
ケース1	夫	朝食の支度、朝食後の食器洗い、掃除(週末)、朝の風呂掃除、クリーニングへ服を出す 自分のものや朝食の買い物、	子供を起こす、朝食を食べさせる、 歯磨きをさせる、着替えさせる、 保育園に連れて行く
	妻	洗濯、夕食の支度、夕食後の食器洗い、買い物、 ごみの分別、ゴミだし、夜の風呂掃除	子供を起こす、保育園の準備、 保育園に迎えに行く、夕食を食べさせる、 お風呂に入れる、寝かしつける
ケース2	夫	掃除、洗濯、買い物、夕食の支度(時々)	保育園への送り迎え、学童保育への迎え 塾への送迎、子供の病気時の通院、外遊び 保育園の行事参加、学童保育の役員、
	妻	朝食の支度、夕食の支度、 食器洗い、掃除	(夫の都合がつかない時の)保育園への迎え 子供の病気時の通院、室内遊び、 おもちゃや食器を片付けさせる、歯磨きの声かけ
ケース3	夫	掃除、風呂掃除、朝食の支度、ゴミ捨て 夕食の片付け、アイロンがけ	朝食を食べさせる、朝の着替え、朝のシャワー (雨天のみ)保育園の送り、おむつ替え、遊び
	妻	洗濯、買い物、夕食の支度、夕食の片付け、 トイレ掃除、キッチン回りの掃除、アイロンがけ、	離乳食を作る、保育園の送り迎え、 夕食を食べさせる、風呂に入れる、寝かしつけ おむつ替え、遊び
ケース4	夫	皿洗い、猫の世話	保育園への迎え、寝かしつけ、 抱っこ、オムツ、その他全部
	妻	洗濯	保育園への送り、寝かしつけ、 その他全部
ケース6	夫	料理など食べること全般	子供が病気の時のお迎えと看病
	妻	洗濯	保育園への送り迎え、オムツ替え、 子供の着替え、ご飯を食べさせる

上は家事・育児の分担の様子をアンケート結果に基づきまとめたものである。自由記述方式であったため、ケース5については「とにかくできることからお互いにしていく」という回答のみで、詳しい分担の様子を伺うことが出来なかったため上の表では省略した。また、他のケースにおいても、私が家事・育児の項目を設定して答えていただいたわけではないので、人によって回答の仕方や量に差があるものとなった。

(1) 負担の重い家事・育児

まず、全体的に見て、家事についても育児についても夫妻がほぼ同じくらいの量を分担しているように見える。育時連家事プロジェクトの報告では、一般的には家事も育児も「ほとんど妻がする」場合が大半を占めていたが、本研究の対象者の家庭では、夫も明確に家事・育児を分担・共有していることが分かる。特に、一般的には負担が重く大変だと思われ、夫の共有度が低かった「夕食を作る」「トイレ掃除」「おむつの取替え」「ミルクをあげる・食事をさせる」「保育園の送り迎え」「病気の子供の世話」について見てみると、「オムツの取替え」や「ミルクをあげる・食事をさせる」、「保育園の送り迎え」、「病気の子供の世話」などの育児に関する項目では、ほとんどの家庭において夫婦がお互いに協力し合って分担・共同しており、特に妻に負担が偏っているということではなかった。ケース1、ケース2では子供が既にオムツやミルクが必要ない年齢になっているため、これらについての記述がなかった。そこで、子供がもう少し小さかった時を振り返ってもらって、オムツを替えたりミルクをあげたりということは夫もしていたのかということについて質問した。

夫：それはしましたね。

妻：離乳食は、離乳食は母乳が出なかった分私にこだわりがあって、全部手作りでやったんですけど、で、だいたい私がその、おかゆさんとか、野菜をつぶしたのとかをまとめて作って、で三日分か四日分まとめて何種類か作って、休みの日にまとめて作って、で小分けにして冷凍しておいて、であとは、あの、その都度電子レンジで解凍して食べさせるようにしたので、まあ離乳食作るのはほとんど私がやってましたけど、夫も食べさせるのは、かかわるようにしてたので。(ケース1)

妻：(略)休みの日は、彼が赤ん坊と一緒に寝て、夜起きたらミルクとかオムツとかに起きて、で、その日は私は自分だけひとりで隣の部屋で朝までぐっすり眠るように代わってくれるようになって、で、私母乳がちょっと出なかったもので、もうほとんどミルクでこの子は育ったんで、そういう意味では、そのときから、父親と母親の育児っていうのは全然差がなくなりました。(ケース1)

夫：一応僕もやってたよね？

妻：うん。。。。。

A, B：あはははは。あれ？あれ？あれ？(笑)

夫：いや、やってたやってた、やってたよね？あのねえ、ベビーフードっていうのは買ったことないですね。さくさくせんべいは買ったこと結構あるけどね。

A：ああ、白いやつですよ？

妻：そうそうそう。

夫：そうそうそう。さくさくは買ったことあるけど、瓶詰めのベビーフードとかそういうのは買ったことはないですね。

妻：うん。

夫：あの、何かほうれん草をごしごしてやって、こうやって鳥の雛に餌やるみたいにぺっぺっぺってそういうのはやってましたね。うちもやってたし。

オムツの取替えについては、夫もやるのが当然のこととして語られ、もちろんウンチの場合でも同じことだと言っている。ミルクについては、母乳の場合は妻にしかあげることにはできないが、ケース 1 のようにミルクで育った場合は、妻も夫も同じようにミルクをあげることに関わったと述べている。また、離乳食になると、ケース 3 でも同じようなことが語られたが、作ることは妻が担当し、食べさせることはお互いに関わるという場合が多いことがケース 1 の語りからも分かる。そして離乳食は、市販のものではなく、手作りのものを食べさせるというこだわりが見られたが、これは、共働きで子供に手をかけてあげられる時間が短い分、やれる部分では手を抜かず思いっきり手をかけてあげようという愛情の現われのようにも思われる。このように本研究の対象者の夫は、一般の男性たちがほとんど妻に任せている負担の大きい仕事も、分担・共同し妻と共に協力し合いながら取り組んでいる。しかし、「夕食を作る」や「トイレ掃除」など家事に関する項目では、本研究の対象者の夫達も分担しているケースは少なく、ほとんどは妻がしている。おそらく、夫の帰宅時間が遅いことなどが原因であると思われるが、なぜこのような分担になったのかの理由については次節で考えていくこととする。とはいえ、朝食を作ったり掃除をしたりというように、比較的負担が大きいと思われる家事も分担していることから、一般の男性よりは何倍も家事・育児をしているといえる。

(2) 平日と休日

また、平日と休日では家事・育児の分担が違う場合が多いようで、休日の場合「遅い朝食(だいたい私が作る)」「夕食の片づけを私がしている間に夫が子供を風呂に入れて、寝かしつける」特に日曜日は「食事や片付けは夫婦で分担する」(ケース 1・妻)や、「休日の昼食、夕食の準備は妻がすることがほとんどだか、2週間に1回くらい私がする場合もある」「休日の昼食、夕食の片付けは本来私がする」「休日に買い物に行く場合ほとんど一緒に行く」(ケース 3・夫)と答えている。またケース 3 の夫は、夜の離乳食を食べさせることについて「平日は妻がやって休日は私がやる」と述べており、入浴についても「平日は妻がやって休日は私がする」と答えていて、平日に妻がやっている家事・育児を、休日には夫がするといったパターンが目立った。逆のパターンが少なかったことから、平日は夫のほうが家事・育児に費やせる時間が制限されている分、休日には妻の分まで普段よりたくさん分担することで均衡をとっていると考えられる。時間があるときは、夫が自ら進んで家事・育児をしようとする思いも垣間見ることができる。

この他にも「夫が早朝勤務や出張でいないときは、朝食や保育園の送りも全て私が担当」「私が月に三回ほどある静岡の研究所への日帰りの出張の場合は、その分早く起きて朝食も私が作り、代わりに夫が保育園の仕度をしてくれる」(ケース 1・妻)や「私が会議等で帰宅が遅いときには食事関係も夫に任せます」(ケース 2・妻)、「雨天の場合私が車で妻と子供を送る」(ケース 3・夫)などのように、その時々状況によって分担状況が変わってくるものもある。中でも、病気の子供の世話など、突然出てくるようなものについては分担が明確ではなく、その時の状況によってどちらがやるかは変わってくる。

(3) 妻の育休中

また、妻の育休中の家事・育児の様子を質問したところケース 2、ケース 3 は次のように語った。

夫：その時は、最初妻がいろいろやっていたんだけど、もうやりきれなくなっちゃって、夜中夜鳴きしてもウンチしても何しても全く起きなくなっちゃったの。それで今度僕がやっていると、今度僕の場合はそれで終わったあと今度会社行かなきゃ行けない訳ですよ。でもう眠くて自転車ももうふらふらふらしながら、で会社でも、労災起こしそうになったりとかそういう風な時期があって、それで当時は最初は妻にほぼ全部やらせてたんだけど、これではお互いもう総崩れでだめにつちやうから、とりあえず妻が起きれるときは妻にやってもらって、妻が起きれなかったら僕がやる。だから要するに、お互いの睡眠時間は削るんだけど、どっちか片方だけが睡眠時間を削るっていうような削り方はしなくなったんですよ。まあ、削り方は半分ずつ削ろうっていう・・・そんな感じかね？ (ケース 2)

A：ああ、そっかそっか。では、奥様の育休中の家事育児の様子、生活の様子は、ほとんどもう、奥様が全部やるかんじですか？

妻：いや、全部はやんない。

A：育休中もちゃんと分担？

妻：でも、朝の掃除とかしていったよね？

夫：うん、概ねしていったね。

妻：何か、産休中は私のほうがたくさんやったけど、生まれてからは、元に戻さなかった？

夫：あ～そうだったっけ？

A：産休中はどんな感じだったんですか？

妻：産休というか生まれる前、産前のときは、本当に一人暇だから（笑）、あとは体を動かしたほうがいいってお医者様から言われてたので、掃除とか本当はずっと夫にやってもらっていたのを、掃除機をかけるのは私がやるようになった。

A：他の家事一般は？

妻：う～ん、散歩がてら買い物に行くのもそうだし・・・。

A：生まれてからはもう、今と変わらず？半々というか、まあ、半々ぐらいな感じで？

妻：だと思っただけ・・・。

(ケース 3)

ケース 2 は最初はほぼ全部妻がやっていたけれども、やりきれなくなった時点で夫もやるようになり、最終的にはお互いに半分ずつ無理をすることで総崩れになるのを防ぐ方法を選んでいる。ケース 3 では、産休中は妻のほうが普段は夫がやる分までたくさん家事をやっていたけれども、育休中に入ると分担は元に戻し、ほぼ半々な感じでやっていたと言う。産休中は子供がまだいないため、妻の空き時間は多く家事全般は妻がやることが多いようだが、妻の育休中はいくら妻が休みでも、家事にプラス育児があり、特に子供から目が離せない時期でもあることから、夫は家事・育児を分担する傾向にあることが分かった。ケース 2 の場合、最初は産休中も妻が全部やっていたということだが、おそらくその後、妻と交代する形で夫が育休をとることになっていたために、産休中はお互いに 100%家事・育児をしようという考えがあったのではないだろうか。しかし、三つ子ということもあり、やはり 1 人で全てをやろうとするのには無理があることを体験から学び、お互いが総崩れにならない程度に分担するという形になったのだと考えられる。

(4) 細かい家事と二世帯同居

これまでのように、一般的に家事として認識されやすいものの他に、出かけるときにテレビや電気を消したり、戸締りをしたりその確認をしたりなどのような、非常に細かいことも家事には含まれる。世の中の男性の中には、このような細かい家事が存在することにも気づいていない人たちがたくさんいると思われるが、本研究の対象者たちは、このような細かい家事をどのようにこなしているのだろうか。

妻：う～ん、すごい細かいこと、やっぱり家事って、洗濯とか料理とか大づかみでやるといろんなカテゴリーがあるけど、夕方暗くなったらカーテンを閉めるだとか、シャッターを下ろすとか、雨が降らなかったときには花に水をやるだとか、そういう何て言うか細々したところは、絶対気が付かないから（笑）。

A：出かけるときに電気やテレビを消したりとか、戸締りをしたりその確認をしたりだとかそういうのは？

妻：それはできるかな。

A：そこはできる？

妻：電気とか戸締りとかは出来るけど、普段あんまり気にしないようなことは、やっぱり言わないとできないかな。

(ケース 3)

「電気とか戸締りとかは出来る」けど「夕方カーテンを閉めるだとか、シャッターを下ろすとか、雨が降らなかったときには花に水をやる」などのように凄く細かいことは、「絶対気が付かない」と妻は述べている。つまり、一般的に細かいと思われているところまではできるけれども、さらにもっと細かいところになると言わないと出来ないということである。妻はアンケートでも「家事は言えばやるんだけど、自発的に気づいてやるのが少ない」と答えており、やはり家事は広げようと思えばいくらでも範囲が広げられるものであるため、凄く細かいこととなると、夫はなかなか気が付かないことが多いようだ。妻のほうで細部にまで神経が行き届いているということだが、「言えばやる」というコメントからも分かるように、決して夫はやりたくなくてやらなわけではない。また、祖父母と同居しているケース 2 にも、細かい家事について質問した。

夫：てゆうか、電気・・・基本的に僕のほうが家を出る時間は遅いんですよ。

妻：まあ、じいちゃんいるからね。そんなに気にしてないかも、うんうん、そこは。

子 1：じいちゃんが掃除してくれる。

妻：そうそうそう。

夫：うんうん。ただ一応、じいちゃんはじいちゃんだから、あんまり当てにするのも気の毒だから、それなりにやっついて、たまにちょっとう～んやばいなって思ったときに電話して、あれ電源切れてるとかいう話はしますね。 (ケース 2)

祖父がいつも家にいることから、細かい家事については特に気にしていないことが伺える。もし、外出先などで電源など細かい家事が気になったときは祖父を頼るが、細かい家事に「気づく」のは、妻だけでなく夫でもある。もしかすると、祖父母と同居しているケース 2 の場合には、この他にも実際には夫婦 2 人ではなく祖父母が分担している家事・育児もあるのではないかと思ひ質問してみた。

夫：うんとねえ。掃除は昼間しててくれたりすることが多いですね。それとやっぱり、洗濯は干していくんだけど、その風が強い日とか雨が降ってきそうな日っていうのは、やっぱりじいちゃんのほうで取り込んでくれてたりっていうのはありますね。

A：ご飯とかは別々ですか？

夫：ご飯はもう別ですね。上にもキッチンあるんで。それは別々です。

A：基本的に家事は別々といえば別々なんですか？

夫：基本的に別々です。だから、上には洗面所もあるトイレも上にはあります。で、共有しているのは玄関とお風呂くらいですね。後はもうほとんど別生活ですね。 (ケース 2)

ケース 2 の場合は同居といっても 2 世帯住宅であり、祖父母とは完全に別生活だと述べている。

したがって、家事も育児も基本的には全て夫婦2人で分担・共同しているということになるが、2人では手が回らなかったときや緊急のときなど、いざという時には祖父母の手を借りることもあると言っている。共働き家庭の家事・育児にとって、いざというときに頼れる人がいるということが、非常に大きな意味を持つことは間違いない。

(5) 家計と冷蔵庫の管理

さらに、家事・育児をする上で知っておくことが重要だと思われる、家計の様子や冷蔵庫の中身などについては、夫婦がお互いに全てを把握しているのだろうか。

妻：それは結構そうね。

夫：そう。

妻：家計はうちはねえ、別会計だからね。

中略

夫：例えば、食費なんか考えるじゃないですか、生協は妻のカードで買うんですよ。で、マルエツってダイエー系の店があるんですけど、マルエツは僕のカードなんです。

中略

妻：まあ、その辺は適宜話し合っつて。

夫：うん。だから変な話、今、「今月じゃあ妻のほうがかしいからお金ちょっとちょうだいよ」とか「僕のほうがお金ないからちょっとちょうだいよ」とかはあんまりないよね。

妻：うん。

(ケース 2)

妻：冷蔵庫は分かっているよね？

夫：うん。

妻：家計の様子は分かっている？

夫：家計は、いや、あんまり分かってない。

A：家計は奥様がやっている感じですか？

妻：そうですね。生活費のお財布は、私が買い物は全般的に担当しているので私が持っているのと、家計簿も一応私がつけてます。

A：ああ、そうですね。冷蔵庫の中身は一応全部把握している感じ？

夫：うん、まあ大体ってとこかな。

妻：う〜ん、残り物とか、あと作り置きして冷凍しているものとかは多分私しか分かってないと思う。調味料がどこにあるのかとか、冷蔵庫の中のものの定位置とかは多分分かってると思う。

(ケース 3)

ケース 2 では完全に別会計であるため、家庭全体の家計の様子についてはお互いに把握していないが、それぞれが自分のお金を責任を持って管理している。今月はどちらが多く使ったなどの言い争いもない。これは共働きでお互いに家事・育児に関わっているからこそ出来る生活スタイルである。ケース 3 の場合は、買い物や料理を担当しているのが基本的には妻であるため、家計は完全に妻が管理しており夫はあまり把握していないようである。冷蔵庫の中身についても同様に、調味料など常に入っているものの定位置ぐらいは把握しているが、残り物や作り置きして冷凍してあるものなどは、妻しか把握していない。しかし、妻に頼まれたときや自分で料理をするときにしか買い物に行かない夫にとって、家計や冷蔵庫の中身を知ることはそんなに重要なことでない。このように、家計や冷蔵庫の中身を把握しているかどうかは、お互いの分担状況に大きく左

右される。そして買い物や料理は妻が分担していることが多いことから、必然的に家計の管理は妻であることが多いと推測される。

この他、これまで見てきた中で妻に多い分担の特徴として夕食の支度や子供の寝かしつけなど、夜にするものが多い傾向がみられる。逆に夫に多い特徴としては、朝食の仕度や子供の着替えなど、朝にするものが挙げられる。さらに「家電製品の入れ替えは夫」で「衣類の入れ替えは妻」(ケース1・妻)のように季節によって出てくる仕事にも分担はあるようだ。このように、夫婦2人でする家事・育児の分担・共同状況には、多様な特徴が見られた。それは必ずしも一定のものではなく、家庭によっても様々であったが、これらの分担・共同状況について、なぜこのような分担になったのかという理由を次節で考えていくこととする。

第3節 家事・育児分担の経緯

一言に「夫婦で家事・育児をする」と言っても、その分担・共同には様々なパターンが考えられる。実際、前節でも見てきたように、分担・共同のパターンは家庭の数だけ存在する。この節では、夫婦の家事・育児の分担がどのようにして決定されていったのかということについて、夫が家事・育児をするようになったきっかけから、順にその経緯を見ていく。さらに、それに関する対象者の語りから、なぜそのような分担になったのかという理由も考えていく。

(1) きっかけ

まず、夫が家事・育児をするようになったきっかけは何だったのかということについて見ていく。アンケートによると、最初からずっとやっているのだから特にかっけはないというもの、結婚がきっかけとなったもの、子供が生まれたことがきっかけとなったもの、妻が働き続けることがきっかけとなったものなど、夫の家事・育児のきっかけにはいくつかのパターンがあることが分かった。当然育児に関しては、子供が生まれるまでは発生しないものなので、子供の誕生がきっかけとなる場合がほとんどであるが、家事は子供がいない夫婦にも必要な仕事である。子供が生まれる以前に家事をしていたかどうか、育児をするかどうかに影響してくることも考えられる。また、育児だけに関わる父親はいるかもしれないが、家事だけに関わり育児には全く関わらないという父親はほとんどいないであろうということからも、家事をするかどうか夫の家庭への関わり方を決める重要なポイントになっていると言える。そこで、ここでは特に家事をするようになったきっかけについて見ていこうと思うが、アンケートの結果面白い傾向が見られた。それは、夫が家事をするようになったきっかけについて、夫の言い分と妻の言い分が食い違っている場合が多いということである。「ほぼ初めからですが決定的なのは長女が1歳の時に熱を出した時に妻が仕事を休めず自分が休むしかない状況がでた時に自分が仕事を休みそれが家族のためになったという実感があってから」と言う夫に対し「三つ子が生まれてから。夫が家事育児をしなければ、家庭生活が回っていかない状況になったから」と妻が述べたケース2の夫婦に夫が家事をするようになったきっかけについて語ってもらった。

妻：あのね、凄いやる気はあったんですよ、初めから。

B：あっ、フォローだ。

妻：あのお、本当に子供が生まれる前から、あ、生まれた頃かな？

夫：いや、生まれる前からだよ！（妻：いや、違う違う。）だって俺だって、俺は出張先からだって帰って来たんだから。

中略

妻：ね？そういうのはあったでしょ。あのね、凄くやる気はもともとあったんだけど、やっぱり能力的に難しいところがあ

ったよね？それがやっぱり能力的にもこう（できるように）なってきたし、やっぱりいろんなことをやらないと回っていかない状況になったのが三つ子が生まれてからだと思うのね。

夫：うん。それはあるね。だから、僕はだから何て言うか、両立という観点から言うとさくらが熱を出したっていうのは僕にとっては大きなきっかけだった。で、次のステップはやっぱり三つ子の誕生だと思いますね。だから、僕の中の評価は、とにかく妻のほうが仕事が休めないし、こいつ（さくら）は医者に連れて行かなきゃいけないっていうのが僕の考え。だけど、僕が会社を休んだっていうのは僕の中の印象でしかないんですよ。多分それはそうよね？

妻：私は何かあんまり覚えてないんですよ。遠足でっていうのとか・・・。いつも言うんだけど。

夫：俺は、とにかく多分一番それがそうだと思う。一番のきっかけとしてね、そのきっかけのスタートがあって、とどめは三つ子だったと。それが僕の間。だからとどめは一致してるんですよ。ね？

妻：うんうん。

A：どうでしょう、今を聞いて。

妻：う～ん。その、仕事との両立っていう面ではそうなんだろうね、きっとね。(夫：そう)ただ、実際の家事の分担という意味では、やっぱり三つ子以降かな。うん。っていうかね、やっぱり回っちゃうんですよ1人だから、別にそんなにやらなくても。ね？(夫：そう)で、回らなかったのがそこなのよ。休みを取るっていうのが結局私一人では見きれなかった、回りきらなかったっていうことだったと思うんですよ。だからやっぱり、回りきらない状況がないと、なかなか男の人は参加しにくいってことだと思います。

(ケース2)

「凄くやる気はもともとあった」と語る妻は、長女が生まれたときから夫が家事・育児に対するやる気を持っていたと認めているものの、「実際の家事の分担という意味では、やっぱり三つ子以降」だと述べている。それに対し夫は「さくらが熱を出したっていうのは僕にとっては大きなきっかけだった。で、次のステップはやっぱり三つ子の誕生」だと述べている。さらに、夫が一番のきっかけだと言う長女が熱を出した時のことについて、妻は「あんまり覚えてない」と言っている。つまり、長女が熱を出したことにより夫が会社を休んだということが、夫にとってはとても印象深い出来事であったが、妻にとっては全く日常の出来事に過ぎなかったということである。夫にとって家事や育児のために会社を休むということは、それ自体が大きな意味を持ち、家事・育児をやっているという実感にもつながったが、仕事をしている妻にとっては、仕事をしているというだけで世間からは家事・育児をあまりしない妻という風に見られがちで、いくら家事・育児のために仕事を休んだからといって家事・育児をよくやっていると褒められない。そして言うまでもなく、会社を休んで家事・育児をすることを自分は何度もやっていて、それは当然のことだという意識も妻にはある。このように、夫が家事・育児をするようになったきっかけには、夫と妻の間の家事・育児に対する意識や程度の違いが明確に現れてくる。つまりケース2の場合、きっかけを一つに統一することは無理なのである。夫から見てのきっかけは、会社を休んでまでやった長女の看病であり、妻から見てのきっかけは一人では回っていかなくなった三つ子の誕生であり、これらはどちらも間違いなくきっかけなのである。

また、ケース1とケース3では、どちらも「結婚した当初から」ということできっかけは夫も妻も一致しているが、その背景には「婚約したときまだ相互に学生で、実際に結婚できるまで3年近くあったのでその間に夫に料理や洗濯などを少しずつ仕込みました」(ケース1・妻)や「結婚する前から、私と結婚するとどういう生活になるか(家事は分担すること自分の世話は自分ですることなど)はしっかりとイメージさせておいた」(ケース3・妻)というように、結婚する以前に意図的にした妻の行為があるようだ。

妻：(略)デートするとき、外で待ち合わせしないで、そのどっちかの家に会いに行くようにして。でそこで私は、その例えば、野菜を茹でるとき、葉物は沸騰したお湯にに入れて、で、じゃがいもとか大根とか、地面の下にあるのは水から煮始めるんだよとか、アイロンかけるときは、すぐアイロンを Y シャツの襟の真ん中から端をこういうふうにくるくるとやってアイロンかけるんだよとか、そういうことをひとつひとつ、順番に教えていったんですよ。でも彼は、私が意図的にそういうふうに住込んでいったっていうのは、あんまり意識してなかったと思う。

A：今初めて知りましたか？

夫：今のそういう説明は過去聞いたことはありません。

(ケース 1)

結婚するまでの間に妻が夫に「意図的」に家事を「仕込んでいった」という説明を聞き「そういう説明は過去聞いたことはありません」と夫は述べている。つまりケース 1 の場合、夫は結婚してから家事をすることは当然のことだからと思い、自発的にやり始めたと思っていたが、実は結婚する前から、「家事・育児をする夫」にするために、妻が意図的に夫に家事を仕込んでいたのである。もちろん夫は、妻にそんな意図があったなど全く気付いていなかったわけだが、結果的には結婚をきっかけに夫も家事をするようになった。

妻：う～ん、結婚するとき、なんとなくこう結婚生活のイメージって、よくこうドラマであるみたいに、旦那さんが帰ってくると、奥さんが「ご飯にする？お風呂にする？」みたいな。

A：あ～、ありますね。

妻：うん、そういうのは絶対にないよって、ずっと。

A：それは、もう、言って？

妻：うんうん。ねえ、一緒にご飯の仕度もしなきゃいけないこともあるだろうし、朝は一緒に起きて掃除もしなきゃいけないだろうっていうのは。

(ケース 3)

ケース 3 の場合も、結婚する前に妻が夫に「イメージさせた」ということだが、それは実際に夫に対して「こうなるよ」ということを言葉にして言うことで、結婚後の生活をイメージさせている。つまりこの場合、妻が「家事・育児をする夫」にさせたという点ではケース 1 と同じであるが、夫がそのことを認識していたかどうかという点では大きな違いがある。ケース 3 では、結婚後は 2 人で家事・育児をしていくという夫婦の合意の上で、結婚がそのきっかけとなっている。

これらの語りからも、やはり男性が自発的に家事・育児をするようになるのは、初めからすんなりといくわけではないことが分かる。その影には、夫が家事・育児をするようになる以前の妻の努力や、家事・育児に対する意識や程度の違い、夫が家事・育児をしなければ生活が回っていかないという状況など、きっかけを作り出す様々な要因が隠れているのである。そして、それまでの生育状況からも、日本の大半の男性は家事をあまり学んでいないという現状があるので、元々の意識の差も当然存在するだろうし、もちろん結婚して夫が突然家事をやろうとしても出来るものではなく、出来ない事や分からない事は妻から教わるしかない。そのため、夫が家事をするようになったきっかけや初期の時期では、妻は夫より家事の先輩であり、「きっかけ」に対して、夫とは違う多少厳しい目線から評価しているのは仕方ないことだといえる。

(2) 分担の決定

それでは、そのきっかけを経て、夫婦の家事・育児分担はどのように決定されていったのかということを見ていこう。

夫：えっと朝はねえ、私がこの子を保育園に送っていくんで、かなりこう時間に制限されるんですよ。だからこの子を送っていこうと思うと、朝メシの時間を何時にしないといけないってあるから、そうやってコントロールするには自分で朝メシつくったほうがいいってことですね。だから朝、だいたい七時から七時半に起きて、ご飯つくって、食べさせて行くっていうのがもう一般化してますし、帰りは彼女が、迎えにいくんで、彼女が迎えにいて、ご飯をつくって、食べさせて、寝かせて、ね、あと洗濯その他をやる、そういうことになってるんですよー

A：だからもう、そのへんはきっちりと決まってる感じですか？

夫：うん、もう大体、うん、子供の送り迎えにあわせて、保育園の送り迎えにあわせて決まってるって感じですね。

妻：勤務時間もねー、会社の勤務時間があの一、私が定時が九時から五時半で一、フレックス制度とか半休があつて一、で主人が定時が十時半から六時半？（夫：そうですね。）で、あんまりフレックスとかないんですけど、夜はエンドレス？（夫：うん）に遅い。

夫：夜は私は、まあ仕事が新聞記者なんですけど、労働組合の役員を去年・今年とやってるんでほとんど帰りが、日付変更線を超えてからこうやって帰ってくるもので、夜は全然、家事ができません。（ケース 1）

夫：話し合いってどうか・・・。

妻：なんとなくだよな？どうなんだろう。ええっとね、初めは私のほうが朝でかけるのは早いけど、夕食の仕度は私がしたほうが合理的だろうとか、その辺からだよな。（夫：うん。）朝の家事は夫が、で夕方以降は基本的に私がって流れになったかな。

A：では、きっちり話し合いでこれは誰がやるって決めたのではなくって、徐々にですか？

妻：うん、まあ。

A：なんとなく？

妻：なんとなくって言うか、最初・・・そうだね、なんとなくって言うか実際生活し始めてみて、「じゃあ私がこれをやっている間に、あなたにこれをやってもらったほうがいいね」みたいな話になって、決まっていっただと思う。

中略

夫：うん、そうだね。二人で、二人合わせでもっとも効率的に終わるような感じに。（ケース 3）

ケース 1、ケース 3 では、子供を保育園に送っていく時間や勤務時間など、時間的な理由により夫婦の家事・育児分担が徐々に決まってきたと語っている。この2つのケースは、夫の勤務時間が朝はゆっくりで夜は非常に遅いという少し特別なケースで、そのことから夜の家事を夫は全くすることが出来ない。このように時間的な理由はどうすることも出来ないのも、お互いに空いている時間の中で効率的に家事をしようと思うと、必然的に朝の家事は夫で夜の家事は妻がやるという分担になってくるのである。つまり2節で、朝の家事は夫で夜の家事は妻がやるという特徴が挙げられていたが、その理由は勤務時間など時間的な拘束により、本研究の対象者では夫のほうが帰宅時間が遅い場合が多いことから、このような分担になる家庭が多かったということである。それに対して、夫の帰宅時間がそれほど遅くはないケース 2 は、分担はお互いの好き嫌いで決まってきたと語る。

妻：そういうものもあるし、あのお、やっぱり向き不向きがあるじゃないですか？それでなんとなく分かれてきたよね？うちはね？

夫：あのお～、料理はあんまり僕得意じゃないですよ。

妻：うん。好き嫌いって言うかね？向き不向きって言うより。

夫：炒め物が多いとかね？一皿ものが多いとか、生野菜が少ないとかね・・・。

妻：焼きそばとカレーと、（夫：そうそう）おでんとシチューと・・・。

夫：で、その～、だからまあ妻がメインでやると。(略)だからメニューは大体妻がね。ただ、他の、その、お洗濯とか、そういうのは別に、干すとかは別に、でまあ、洗濯やって干してっていう間に妻のほうで食事の仕度をしたりだとか。多分逆だとあんまり僕は良いものを作れないからっていうのがあるね。

A：じゃあ決めてるっていうのではなくて、だんだんと決まってきたという感じですか？

夫：とりあえずそのほうが都合よくまわるからっていう感じ？ (ケース 2)

ケース 2 では、プロフィールでも紹介したように夫の帰宅時間が非常に遅いということはない。子供の保育園への送迎も全て夫が担当しており、むしろ妻のほうが会議などでたまに遅くなることがあるようである。このように、ケース 1 やケース 3 に比べて少し時間的に余裕があるケース 2 では、お互いの好き嫌いや得手不得手で分担が決定したと語っている。このことから、家事・育児分担が決定していく過程には、まず第一の要因として時間的な要因があり、時間的に少し余裕のある家庭では第二の要因として好き嫌いや得手不得手といった要因が存在する。そしてこのような過程を経て、徐々に夫婦の家事・育児分担が決定していくのだということが分かった。アンケートでは、全ての対象者に対して家事・育児で好きなものと嫌いなもの、あるいは得意なものと不得意なものを聞いてみたが、やはり時間的な要因により分担が決定してきたケースでは、自分の担当しているものが好き、または得意であるとは限らなかった。むしろ、好きで得意な家事は時間的に出来ないで相手の分担になっていたり、嫌い、あるいは不得意であるけれども自分の担当になっていたりというようにバラバラである。ただ、休日や季節に応じてやる家事・育児などについては、時間的な余裕が生じてくるため、どの家庭でも好き嫌いに応じて分担が決まってくる傾向が見られた。

このように、夫婦の家事・育児分担は「決めた」のではなく「決まってきた」のだということが言える。そしてそれは、厳密に決められているのではなく、その時々状況により、相手が出来ないときには出来るほうがするというものや、分担を決めるまでもない細かい家事などについては、お互いに気づいたほうがするという形になっている。さらに、一つの家庭の中でも、子供の成長と共に家事・育児の内容は変化しているはずであるが、夫婦の分担はそれほど変化しないようである。これは、分担を決める要因である、「勤務時間」や「好き嫌い・得手不得手」がそれほどすぐに変化するものではないということや、自分が分担しているものは長く分担するほど要領も得て能力も技術も向上するということから、ずっと同じものを担当しやすいと考えられる。ただ、家事・育児経験が長い夫ほど、家事・育児を早く上手に出来るようになり、色んな事にもよく気がつくようになるので、分担自体に変化はなくとも、その他たくさんある細かい家事をたくさんするようになり、全体としての家事・育児の量は増えていくことになる。

妻：いや、あの～、やっぱりやるようになったと思いますよ。

夫：ああ、そうですか。ふ～ん。

妻：自主的に。それも。 (ケース 2)

妻：やっぱり、それで色々気がつくようになるんだと思います、やってくうちに。

夫：そう。だから、冷蔵庫開けて今日はこんくらいものがあるから、この程度だったらこんくらいのものでできるとか。

妻：そうね。最初はやっぱり全部買い揃えてやらなきゃみたいなのもあったもんね？

夫：そうそう。それで、冷蔵庫とかあんまり色んな物を見ないで、これ買ってあったのにまたこんな同じ物を買ってきてっかっていう・・・。

妻：あははは。そう！減った減った！そういうこと。 (ケース 2)

これは「分担に変化はない」と言ったケース2の語りであるが、夫の家事・育児に対し妻は「やるようになった」それも「自主的に」と述べている。そして最初は「全部買い揃えて」していた料理を、冷蔵庫にあるもので作れるようになったことや、冷蔵庫にあるものをダブって買ってくるのが「減った」と述べている。つまり、家事・育児をやっている中で、見た目の分担に変化はなくとも、徐々に量的にも質的にも変化していることが分かった。子供の成長と共に夫の家事・育児も成長しているのである。

(3) 出来ない家事

前項で見てきたように、様々な要因によってある程度決まった分担のもと、夫婦でお互いに家事・育児をこなしている。しかし、状況に応じて相手の担当しているものを自分がすることもあり、厳密に分担が決められているというケースはなかった。では、家事・育児に関してお互いに全く出来ないものというものはあるのだろうか。

夫：そういうのってあるかなあ。

妻：あるよ～。あたし湯名人できないもん。

B：ははは。なるほど～。

夫：ああ、そうかあ！

妻：分かります？湯名人って24時間風呂なんですけど。

夫：要するに、メカ的なことは俺のほうが良く知っているんだよね。

妻：そうそうそう。

夫：だから、変な話レンジフードとかああいうのは僕がやっちゃうんだよね。

妻：そのかわり、子供の服の衣替えとか、そういうのは絶対分かんないでしょ？

夫：うん。わかんないねえ。

妻：ね！！子供の服買って来るとかさあ。そういうのはできないでしょ。

夫：うん。

(ケース2)

ケース2では、24時間風呂やレンジフードなど「メカ的なこと」は妻は全く分からないと言い、逆に夫は「子供の服を買ってくる」とか「子供の服の衣替え」などは全く分からないと言う。一般的に家事・育児を分担していない家庭でも「メカ的なこと」に関しては夫がやるケースが多いように思われるが、これは女性より男性のほうが「メカ的なこと」に強いという性質があるということなのだろうか。このことに関しては5章で詳しく分析していきたいと思うが、夫が出来なかった「衣替え」や「子供の服を買ってくる」といった家事は、おそらく毎日やらなければならない家事ではないことから、これまでずっと妻が担当しているものであるため、夫は全く分からないし出来ないのであろう。

妻：私は車の掃除かな。

A：ああ。

妻：車の掃除は多分全然わかんない。

(ケース3)

ケース3の妻は「車の掃除」が分からないと言っている。普段車は夫が運転しており、夫のものであるという意識があるのであろう。従って車の掃除は夫の担当となっており、妻がすることがないので全く分からないのだと考えられる。

このように夫婦で家事・育児をやっている、お互いに出来ないものがいくつか存在することが分かった。そしてそれは多くの場合、毎日する家事ではなく時間に余裕のあるときにする家事である。そのため夫婦のどちらかに担当がきっちり決まっていることが多く、担当でないほうは全く要領も分からず出来ないのである。また、2節でケース3の夫が、買い物は主に妻がするので家計の様子は分からないと言ったが、このようにある家事とペアになってついてくる家事についても、その基となる家事を分担していなければ全くできないということになる。

また、家事・育児でできないものはないと回答したケース1夫婦とケース3の夫であったが、できるけれども程度の差はあると語っている。

妻：あの、私がこの子を生んだときに、一ヶ月ほど実家にいたんですよ。だから、夫はこの家に一人暮らしをしていたので、だからそんなに差しさわりの無い程度には一応家事全般はできてたので、内容とか程度の差はあるにせよなんとか一通りはできるかな。

A：じゃあ、そういうものは無いと。なさそうですか？

夫：うん、いや、まあ……。 (妻：あはは。) 手間取るものはあるかもしれない。

A：どんなものがありますか？ 手間取るものって？ 何か思い当たるものはありますか？

夫：何だろうね……。やっぱり何か、しまい場所が分かんなかったりすることはあるかもしれない。でも、探せば見つかるから。 (ケース3)

夫：うん、ただ私の料理は下手ですけどね。

一同：(笑)

妻：得意不得意があるので、えーと例えば私は、片付けあまり好きじゃないし得意じゃないんですけどー、この人のほうがお掃除すると、きちっと四角い部屋を四角く掃く、私は四角い部屋を丸く掃く。 (ケース1)

「手間取るもの」はあってもなんとか一通りは出来ると言うケース3の夫や、「ただ私の料理は下手ですけどね」と語るケース1の夫のように、出来ないものはないけれども、出来ているものの中にも内容や程度の差があると言える。そしてここで語られた手間取ったり下手だったりする家事は、「慣れ」が足りないことが原因にあると考えられる。やはりここにも、普段自分があまりしない家事であることが関係していると言える。また、ケース1の妻が「この人のほうがお掃除すると、きちっと四角い部屋を四角く掃く、私は四角い部屋を丸く掃く」と語っているが、実は全く同じことをケース2の妻も語っている。これは単に性格の違いなのであろうか。ここには、妻は家事において「効率」つまりどれだけたくさんの方ができるかを重視するが、夫は「成果」つまりどれだけ完璧にできるかを重視するという側面が隠れているように感じられる。もしかすると、妻にはよりたくさんの方の家事が見えているが、夫はそれが見えない分どれだけやったかの成果によって自分が家事をしているということを確認しているのかもしれない。

第4節 しつけ

育児の中にはもちろんしつけも含まれる。家事・育児を夫婦で分担していない家庭でも、しつけに関しては妻ほどではないにしろ夫も関わっているものと思われる。では本研究の対象者たちはどのように子供のしつけに関わっているのだろうか。

まずケース3では、まだ子供が9ヶ月ということもあり、叱ったり何かを教えたりということはまだしていないと言う。しかし「もうそろそろ始める」と述べていることから、子供に対するしつけが始まるのは、大体1歳前後であると考えられる。また、ケース3はしつけにはどちらも

関わると言うとも述べており、夫のしつけへのやる気が感じ取れる。では、実際に4人の子供を育て「おもちゃや食器の片付けをさせたり、歯磨きの声をかけるなど躰っぽいところは私がやります」(ケース2・妻)とアンケートで回答したケース2にしつけに関して話を聞いた。

妻：ああ、きっと怒るところが違うとか、腹の立つところが違うんだらうなどは思うんだけど。

A：躰はご主人もやっぱり関わっていらっしゃるんですか？

中略

夫：うん、それ(親を冒瀆すること)をされるとね、外へ出すよね。くらうほどだすよね。おトイレ入れちゃうぞって。

A：それはお父さんが？

夫：そう。僕がやりますね。「父ちゃんのバカ！」とかいったりとかね。「片付けなんか父ちゃんがやればいいんだ！ペー！」とかやられたりすると、もう、やりますねそれは。

A：ああ。奥様はやらないんですか？そこら辺は。

B：あっ、笑ってる！笑ってる！

妻：くくくく。違うんです。私は朝なんです。あはは、朝！！

子1：そう朝いつも焦ってる。

妻：そうそうそうそう。急いであるから。カリカリしてるの。鉄拳制裁が、母ちゃんの鉄拳制裁が(笑)

夫：俺も、着替えないとやっぱケツ叩くね。お尻は叩くね。

子1：うへへ。

中略

妻：まあ、確かに、親を馬鹿にしたようなことを言っちゃいけないよっていうのは躰かもしれないけど、生活習慣っぽいところは私かもしれない。

A：ああ。

妻：帰ってきたらちゃんと靴を揃えて脱ぐとか、靴かけてとか、弁当出してくらいは(夫も)言うけどさ、靴はその辺に放ってあっても言わないでしょ？

夫：うん。俺言わないね。

(ケース2)

子供のしつけに関しては「腹の立つところが違う」と述べている。実際に夫は「親を冒瀆すること」に対して怒り、妻は「朝急いでいるとき」に怒るということがこの語りからも分かる。ただ同じ怒るといっても、夫の場合「外に出す」「おトイレに入れる」「ケツを叩く」のように、悪いことをした子供に対して叱ると共に罰を与えることでしつけをしている。それに対し妻は、「鉄拳制裁」と言っているがおそらく頭を叩く程度のものであると思われる。このことから、子供から見て悪いことをしたら叱る存在は父親であり、怒ると怖いのも父親であると考えられる。つまり、悪いことをした時「叱る」というしつけを担当しているのが夫であり、「帰ってきたら靴をそろえて脱ぐとか、靴かけてとか、弁当出して」のように「教える」という意味でのしつけを担当しているのが妻であるといえる。上述のアンケートで妻が回答した内容も「教える」という意味のものであったし、実際インタビュー中にも長女の漢字の宿題を見てあげていたのも妻であった。これら「教える」しつけは、子供の年齢にもよるが妻が言うように「生活習慣」に関することが多く、夫がこれらに関して「俺は言わないね」と最後に言っているが、実はこの後これに対し妻は「だって、自分がそうなんだから」と言ったのである。つまり生活習慣は自分が出来ていないと子供に教えることは出来ないし、教える側の意識の違いも大きく関係してくるのである。このようにしつけには、少なからず父親と母親で違った役目が存在している場合がある。

第4章 夫婦ふたりで家事・育児をすること

ふたりで家事・育児をすることとは共同作業である。それゆえ、前章で見てきたように多様な分担・共同の形があり、ふたりで協力し合い一日の生活を組み立てている。これらは、一般的には妻が全てひとりでしていることが多く、その責任も妻がひとりで背負い込んでいる場合が多い。しかし、本研究の対象者たちのように夫婦がふたりで家事・育児をすることとは、その責任もふたりで背負っていかねばならないのである。このように、性別にこだわらない新しい分業の形、仕事も家事・育児もふたりでやるからこそ生じてくるもの、見えてくるものがあるのではないだろうか。本章では、実際に夫婦がふたりで家事・育児をやってみて、そこから生じる影響やお互いの家事・育児に対する考え方など、一步踏み込んだ視点から探っていきたい。

第1節 悩み

ふたりで家事・育児する夫婦は、お互いにどんな悩みを抱えているのだろうか。アンケートの結果、最も回答が多かったのが、「仕事との両立が体力的、時間的にしんどい」（ケース1・妻）、「仕事との両立上体力的にしんどくなっている」（ケース1・夫）、「夫の帰宅が遅い」（ケース3・妻）、「私の仕事からの帰りが非常に遅いので夕食の片付けや、子供の入浴などができない」（ケース3・夫）など、仕事との両立に関する悩みである。

(1) 仕事との両立

フルタイムの共働き家庭では、子供がいないうちは、お互いに好きなだけ仕事をしながら、残った時間で家事をしていけば良いかもしれない。しかし、子供がいるということは、家事も育児も子供に合わせて待たなしで押し寄せてくるのである。本研究の対象者たちもみんな、最も手がかかると思われる小学校に入学する以前の子供を持つ親である。彼らは決して暇だから家事・育児ができるのではない。2章でも見てきたように、みんな長時間労働であり、熱心に仕事に取り組んでいる人たちばかりである。ではなぜ、家事・育児ができるのか。それは彼らが家事・育児のために時間を作っているからなのである。

夫：勤務時間はどうしてもね、帰ってくるのはだいたい12時から1時くらいには帰ってきて・・・

妻：うそ、3時じゃない(笑)。

中略

夫：それから寝ると睡眠時間が3時間から4時間。朝は必ずご飯作って、連れて行かないといけないから、3時間から4時間くらい・・・。

A：実はそうですね、奥様もそのことを気にかけてるみたいなのも書いてありまして、はい。でもちょっとその反面ですね、奥様のほうは、こう、自分ほど、こう、旦那様が仕事をあきらめていないんじゃないかということにちょっと不満みたいなものもあるみたいなんですよ。

妻：いやおおいに不満ですよ(笑)。

夫：確かにおりてないですね。確かになんていうかな、仕事は仕事で、この子が生まれる前よりは仕事は実は、時間的にはセーブされてるんで、仕事としては。あの一、勤務としてはね、あの一できるだけ、夜回りというか、あの、夜政治家のところへ行ったりとか、役人どこに行くのとかはできるだけセーブして、早いとこ帰るっていうとか。朝、早くね、朝早く（妻：8時自民党本部とか。）政党の会議が朝8時とかに始まるからそれに合わせていけなくちゃいけないけど、それも任せられるところは同僚に任せるとかやってたんだけど、労働組合委員長が去年、7月からかな、ずっとやってて、それがプラスになったぶん、どうしても無理が来たんですね。（ケース1）

これは、アンケートで「仕事との両立上体力的にしんどくなっている」と回答したケース 1 の会話である。夫は毎日帰ってくるのは3時前後であるが、朝は子供に「必ずご飯を作って」保育園へ「連れて行かないといけない」ので、毎日睡眠時間は「3時間から4時間」だと述べている。毎日この生活を続けているのだから、体力的にしんどいのも当然である。実は、夫は去年の7月から労働組合の委員長をやっていて、通常勤務が終わったあとに、時間外労働で労働組合の活動をやっている。その結果、「それがプラスになったぶん、どうしても無理が来た」と言っているが、それまでの働き方について、「夜政治家のところへ行ったりとか、役人ところに行くのとかは出来るだけセーブして早いとこ帰る」とか「朝早く政党の会議」に行かなくてはならないときなどは「任せられるところは同僚に任せる」ようにしていたと述べており、忙しい中にもセーブできるところはセーブすることで、自分で家事・育児をする時間を作り出していたことが分かる。また、このことから家事・育児の時間を作るためには、会社や同僚の理解が非常に重要だということが言える。おそらく最初は周りの理解が得られず辛い思いをする時期もあるだろう。しかし、家事・育児のために仕事をセーブするという生活を続けることで、周りも徐々に理解してくれるようになるのではないだろうか。つまり、家事・育児の時間を作るためには、周りの理解を得ることからはじめなければならないのである。そして、特に男性の場合、女性よりも周りの理解を得ることが難しく、家事・育児の時間を作るための努力もより一層必要となってくると考えられる。ケース 1 の場合、夫はすでに周りの理解を得ており、家事・育児の時間も自分で作ってきた。しかし、去年から引き受けた労働組合の仕事は、人に任せることのできない仕事であり、自分で時間のコントロールができない。それでも、家事・育児は生活するうえで、やめたり諦めたりすることのできないものである。労働時間が延びても、家事・育児は今までどおりやろうとするため、仕事は増えた上に睡眠時間は減り、体力的にきつくなっているのである。しかし、やっぱり夫の労働時間が長くなった分、その間の家事・育児は妻が全てひとりで背負っており、そのしわ寄せが妻にのしかかっている。だから妻は、夫の身体を心配しながらも、夫が自分ほど仕事を諦めていないことを「おおいに不満」に思っているのである。

また、妻の育休が明けてまだ1ヶ月ちょっとというケース 3 も、「夫の帰宅が遅い」ことを悩んでいるようだが、このことを我が家のメインテーマだと語る。

妻：そ、我が家のテーマ（笑）。

夫：メインテーマだね。

中略

夫：まあその、土日？例えば休日にも出勤しなきゃいけない場合とか、深夜まで仕事がかかってしまう場合とかある代わりに、まあ割ととっていいの、平日突然休みたいとか、ちょっと遅刻したいということに対しては、割と融通がきくので、そういうところではできる限り、うん、そういう形で貢献したいなと思ってますね。 (ケース 3)

夫：結構独身者が多いし。上司にも独身者がちょっと混じってたりして、何か、どうなんだろうな・・・。

B：理解を得られるのが？

夫：まあ、それはちょっと、結婚している人もいっぱいいるんですけどね。なかなかねえ、理解っていうか、まあ、いざとなったときにはちゃんと分かるんで、日ごろ・・・。

A：日ごろ？

夫：うん。普段の自分の時間の何%を会社に、何%ぐらい会社にいいかという感じ方がちょっと、違うんじゃないかな。

夫：う～ん。でも、割とあの職場だけがそうかっていうと、そうでもないような気もするんですよね。

A：う～ん。

ケース 3 の場合、同じ仕事との両立の悩みといっても、体力的にキツイという悩みではなく、どう家事・育児の時間を作っていくかという悩みである。つまり、ケース 3 の場合、子供が生まれてから本当の意味で、ふたりで仕事も家事・育児もという生活をはじめて、まだ 1 ヶ月ちょっとしか経っていないため、夫は会社や周りの理解をまだ得ることができていないのである。そのため、家事・育児の時間を作るのにとっても苦労し、「我が家のメインテーマ」というほど悩んでいる。もちろんこの場合も、そのしわ寄せは妻に来ていて、アンケートでは「仕事なので仕方ないが、せめて週に 2 回は 8 時前に帰ってきてくれれば子供の入浴が楽なのだが」ともらしている。夫は休日出勤や深夜残業もあるため、その分平日突然休みたいたか遅刻したいというときには割と融通が利くので、できる限りはそういう形で妻に「貢献したい」と述べている。このように「いざとなったとき」には会社の理解は得られるけれども、「普段の自分の時間の何%を会社にいいかという感じ方がちょっと違うんじゃないかな」と夫は感じている。つまりは休日出勤や深夜残業のことであるが、「結構独身者が多い」ということが理解を得られない原因の一つではないかと夫は考えている。もちろん、これも一つの原因であると思われるが、独身だからといって長時間労働していいというわけでもないし、これが過労死の原因となることもある。要は、独身とか子供がいるとかに限らず、どんな場合でも自分の時間をもつことは大切なことであり、そのために仕事をセーブするということが悪いことではないということを、みんなが理解することが重要なのである。夫はアンケートで「会社にいる時間を短くしてもう少し(家事・育児を)できるようにしたい。そのためにはいま会社で担当している業務が多いので、徐々に業務を減らしていくように周りや調節していきたい。それがうまくいかない場合、異動希望や転職を考えたい。妻には無理をしないで欲しい」ということも言うており、どうやっても家事・育児の時間を作ろうとしている。ケース 3 の夫の会社でも、もう少し時間をかけて理解を求めれば、ケース 1 のように家事・育児の時間を自分で作ることが可能になるのではないだろうか。

このように、フルタイム共働きで家事・育児をしている夫婦にとって、時間的にも体力的にも仕事との両立は大きな問題となっている。しかし、どんなに大変でも、彼らは家事・育児を諦めるという選択はしない、というより、子供はもうそこにいるのだから諦めるという選択はできないのである。みんなどうにかして家事・育児の時間を作るため、会社や周りの理解を得ようと必死である。その結果子供が 4 歳になるケース 1 や、ここでは取り上げなかったが子供が 6 歳になるケース 2 では、周りの理解も得られ、家事・育児の時間を自分で作ることに成功している。ただ、いくら理解が得られたからといって、仕事を休んでいることには違いないのだから、快いわけではないだろうし、それなりの苦労はあると思われる。また、ここでは特に夫について取り上げたが、決してこの悩みは夫だけのものではない。妻もフルタイムワーカーであり、家事・育児の時間を作るため会社で様々な努力をしている。ただ、ケース 3 の夫も「社会全体が変わっていかなくやどうしようもない」と述べているように、社会の体質はまだ「男は仕事、女は家庭」から変わっていない。そのため、働いている女の人に対しては家事・育児もするものだという思いはあっても、男の人に対して家事・育児もするものだという理解を得るのはなかなか難しいと考えられる。したがって、新しい分業の形では、長時間労働の夫は、仕事と家事・育児の両立に特に苦労するのである。

(2) 子供が病気になったとき

さらに、仕事との両立の上で最も大変なのが子供が病気になったときの世話である。これは共

働き夫婦の育児にとって、非常に大きな問題であるようだが、日常的にあるものではなく突発的に起こりうるものであるがゆえに、仕事との兼ね合いから分担を決めるのは困難なようである。では、子供が病気になったとき彼らはどのように対応しているのだろうか。

妻：あの～、保育園から私の職場に電話があって、基本的には私が帰るようにしてるんですけど、1回か2回、帰ったよね？っていうかね、もう保育園に行ってから5、6回呼び出しをくらってるんで。

A：ああ、そうなんですか。

夫：うん。

妻：ええ。だから2回くらいは行ったかな？

夫：2回、迎えに行きましたね。

A：早退ですか？

夫：早退。あ、迎えか遅刻だか忘れちゃった。

妻：遅刻だ。そうだ、午前(夫が)休んで、午後私が休んだんだ。

夫：うん、うん、うん。やっぱりそれが一番、病気になったときっていうのが一番大変なことだなあって思いますね。二人で働いているとね。 (ケース3)

ケース3では子供がまだ9ヶ月で、一番病気をしやすい時期であり、保育園に行き始めて一ヶ月ちょっとでもう5、6回も呼び出しをくらっている。だから「病気になったときっていうのが一番大変なことだなあって思います」と切実な思いを語る。そのときの対応としては、夫のほうが仕事が忙しいので基本的には妻が保育園から電話を受けて対応するが、妻が行けない場合は夫が対応する。また、朝から病気の場合には「午前(夫)が休んで、午後私が休んだ」と妻が言うように、片方は遅刻、もう片方は早退をすることで、お互いに仕事への影響がどちらかに偏ることのないよう対応している。

では、子供が4歳になるケース1の場合はどうだろうか。

妻：はい。例えばこれ、この子、そのドアではさんで骨にひび入ってますけど(笑)、(A：はさんじゃったの？)ですぐとなり、整形外科があって、そこ9時からなんですけど、で私、ここから会社まで自転車で15分なんですけど、8時、いや9時ちょっと前に行って、診察券出して順番とりして、で一その間に主人が出勤の仕度とか済んでこの子をつれてきて、で診察がはじまるときに私と交代して、私はあわてて自転車で会社いく。でもそうすると、9時ちょっと過ぎちゃうんで、会社に電話して、「すみません、子供病院に連れて行きますので30分遅刻します」って行ってそういうときフレックスを使うんです。

A：半日休暇は、どんなとき？

妻：半日休暇はですねー、えー、子供が、熱を出すと保育園から会社に電話があって、で「38.3℃ですから引き取りに来て下さい」っていうと、そうすると机の上に広がった仕事をバタバタ片づけて、「すみませんすみません」とまわりに謝って、で自転車で保育園にかけつけて、午後は半休っていう感じなんです。でダンナに電話して、「子供が熱出した。明日以降の体制どうする」って話し合って、で、どっちか休めるほうが一日くらい休んで、で、明後日はベビーシッターさんにするか、それとも熱が下がってきたら病後児保育にするか、っていう感じで。

A：そういうときは、どちらが迎えに行くか、とか、どちらが休むかっていうのはあの、どういうふう決められるんですか？

妻：お互いの仕事の都合ですね。 (ケース1)

ケガなどで子供を病院に連れて行く場合は、妻はフレックスタイム制度を利用して遅刻をし、子供が熱を出したなどで保育園から呼び出しがあったときは、半日休暇を利用して午後は仕事を

休むという形で対応している。また、朝から子供が病気の場合は、「どっちか休めるほうが一日くらい休んで、明後日はベビーシッターさんにするか、それとも熱が下がってきたら病後児保育にするか」というように、話し合いをして、お互いの仕事の都合がつくほうが迎えに行ったり休んだりして対応している。

このように、病気の子供を保育園では預かってくれないので、共働きの場合仕事への影響は避けられない。そのため、夫婦はお互いに良く話し合っ、そのとき最も仕事への影響が少ないほうが対応するという方法をとっている。その場合、フレックスタイムや半日休暇、ファミリーフレンドリー休暇、が非常に役に立っているようである。そのほか有休を使うことも多いようだ。しかし、何日も病気が続くと、何日も仕事を休むわけにはいかないので、その場合はベビーシッターさんや病後児保育など、外注することでどうにか対応する。この2つのケースの場合、妻が対応する場合のほうが多いようだが、それは妻のほうが保育園に近かったり、仕事の都合がつきやすいなど、たまたま条件がそろっていただけであって、実際には「どちらか片方だけにしわ寄せがいかないこと」を一番の条件と考えて、よく話し合っ、対応している。

第2節 両立のコツ

前節で見てきたように、ふたりで働きながらする家事・育児には、仕事との両立上問題も多く、彼らとはとにかく忙しい毎日を送っている。それゆえ、彼らには時間の余裕はほとんどなく、仕事と家事で一日はあっという間に終わってしまう。しかし、彼らはそんな忙しい毎日の中で、時間を作る方法や、家事・育児を効率的にする方法など、多様な仕事との両立のコツを経験から考え出している。ここでは、その両立のコツを探っていきたい。

(1) 家事の省力化

「家事はどれだけうまくやるかよりも、どれだけうまく手抜きしているか」(ケース 3・妻)というように、時間のなかで家事をやっていくには、家事そのものにかかる時間を短くすることが重要なポイントであるようだ。

妻：例えば、このケーキを作るのに、もうあらかじめサツマイモを蒸して冷凍しておいたものを買って来ておいて、それである今日はこれ作るうってときに、冷凍で半加工の状態にあるものを工夫するだけで完成品にしちゃうとか。…(略)子供ができてからの食事って、7時半に保育園に迎えにいったら、7時50分くらいにここに戻ってきて、それから後片付けと洗濯物をやりながら、30分以内でなんか作るとなると、なんかほんとにファミリーレストラン時代に身に付けた冷凍食品をこういうふうに加熱して、一皿の料理、みたいな、そういうので。で、会社の社員食堂にいくと、なんか自分の作ったようなメニューにそっくりな、缶詰のシーチキンと、それからこの野菜と、このこっちがわのメインディッシュの付け合せの野菜が一緒だな、みたいな。なんか料理がそんなふうになってるの。(ケース 1)

夫：具体的にか、どうだろうね？まあ、例えば掃除だったら、今日はここはいいだろうとかそんな(笑)。

A：あははは。まだキレイそうだみたいな？

夫：うん、まあ、だからその朝の時間との兼ね合いで、時間と汚れ具合と、そんな感じですかね。

A：他には？ご飯とかは？手抜きはないですか？

妻：いや、もう、それはばんばん手抜きがあるよね。でも、普通の人がやってるみたいに、冷凍の野菜とかを一応常備しておいて、野菜が足りないなって思ったときはそれを使うようにするとか、あとはもう、2、3日分まとめて作っておくとか。

うん・・・。

(ケース 3)

「冷凍で半加工の状態にあるものを工夫するだけで完成品にしちゃう」、「冷凍の野菜とかを常備しておいて、野菜が足りないなって思ったときはそれを使うようにする」、「2, 3日分まとめて作っておく」と述べているように、特に料理は時間を有効に使う上で手抜きしやすいものであることが分かった。その場合、いつでも使いたいときに好きなだけ使うことが出来る冷凍食品は、非常に重宝されている。しかし、完全に出来合いの冷凍食品やインスタント食品、レトルト食品などはあまり使われていないようで、ケース3の妻の「野菜が足りないって思ったとき」に使うという語りからも分かるように、手を抜きながらも栄養など健康面には十分配慮しながら、短時間でできる料理を作る工夫をしている。また、ケース3の夫が「掃除だったら、今日はここはいだろう」という感じで時間と汚れ具合との兼ね合いでしないときもあるというように、そのときの状況により臨機応変に手抜きをするということも大切である。

また、ケース2は、家事が機械化してきたと語る。

夫：さっき言ってたように、まず（洗濯機）二層式だったのを全自動にしたりとか、食器洗い機を買ったとか。やっぱりオムツとかがすごいいっぱいあって、だけど雨の日に乾かないとかっていうときに、乾いてくれなきゃ困るから結局乾燥機を買った。で、おねしょが大変だったから、布団が乾かないと困るからやっぱり布団乾燥機を買ったとかで、すごく機械化していった。

A：うん、まあでも早く終わらせるコツですよ？

夫：そうですね。

妻：省力化を図ったんだよね。

夫：すごい機械化したね。

妻：設備投資し。

中略

妻：あとやっぱりその省力化するとか手を抜くっていう方法を色々工夫して、買い物は生協で宅配で。買い物も結構時間かかるからね。

夫：あとやっぱりその夜中起きなくなったっていうのも、最初は夜も布オムツだったんですよ。で、それを夜は紙おむつにしようってことになったんだよね。やっぱりオムツがべちゃべちゃで気持ち悪くて泣く。けどもそういうことをさらに三つ子でやってるからしょっちゅう起きてなきゃいけない。それを紙にただで随分寝られるようになったっていうのはあるから、何か気負いみたいなのがあったのかな？何かこうしなきゃ地球環境によくないとかそういうのがあったりだとかね？

妻：うんうん。

夫：だけど、結局それを守っていくと自分たちがダウンちゃうから、そこまでやらなくてもいいからとりあえず自分たちが生活していけるような状況に、今あるレベルからうまくレベルを落とすとか上げるとか、要するに今あるところから違うやり方を作っていこうっていうっていう感覚は結構できてきましたね。 (ケース2)

ケース2では「(洗濯機)二層式だったのを全自動」にしたり「食器洗い機」を買ったり、「乾燥機」や「布団乾燥機」を買ったりと、家事がどんどん機械化してきたと言う。また、地球環境によくないという気負いからずっと布オムツを使っていたが、三つ子が生まれたことでそれではやっていけなくなり、紙おむつに替えたと言う。一見普通の家庭でもやっていることのように思えるが、もともと布オムツを使っていたケース2にとって、紙おむつに替えることは、寝る時間の確保だけでなく洗濯物を減らすという意味でも大きな省力化となっている。その他にも「買い物は生協で宅配」してもらおうとか、「掃除は外注していた」(ケース6・妻)のように、外注して家事を代行してもらおうという方法も、家事時間を短くする工夫である。しかし、これらの家事の省

力化はどれも、本来なら無償で行われる家事労働に、ケース2の妻が言うように「設備投資」したりお金を払ってやってもらったりしているのである。一般的にはこのようなやり方は、生活レベルを下げているように見られがちで、もちろん一般家庭よりも日常生活にお金がかかっているわけだが、彼らは二人で働いているので、一般家庭よりも収入は多く生活水準も高いということがいえる。つまり、家事を省力化したからレベルを落とすとか上げるとかではなく、今ある生活レベルのまま「違うやり方を作っていこうっていう感覚」だと述べているように、お金を出してでも、時間を作りながら生活していくこれらの工夫は、彼らの生活に最も合ったスタイルなのである。

(2) 育児の工夫

家事では、機械化や手抜きをすることで、省力化、効率化を図っていたが、育児では生きた人間が相手であるため、家事のように機械化や手抜きをするわけにはいかない。つまり、育児は仕事との両立の上で最も効率化が難しく、思い通りにはいかないものなのである。前節では、子供が病気になったときにフレックスタイムや半日休暇など、会社の制度を利用して対応することをあげたが、これらも育児の時間を作るための工夫である。また、育休明けから育児時間を取得している妻が多かったが、これも長期にわたって育児の時間を確保するための工夫である。これらは全て、仕事の時間を削るという方法で育児の時間を作っているが、それ以外にはどんな工夫をしているのだろうか。

妻：(略)あの都市部では保育園にすぐ入れるってことはなくて、あの年度の始めの四月に空きができるんですね。で、この誕生日10月なんで、で一、まあもう妊娠中から、大田区と品川区の両方の区役所に保育園を問い合わせたりして(A：はい。)、でそれをもとに、えーとここに引越しを決めて家買った、マンション買ったんですけど… (ケース1)

妻：(家を買うとき)ここに決めたのが、あそこに保育園があるからここにしようっていう。 (ケース2)

ケース1もケース2も「保育園があるから」という理由で、その近くに家やマンションを購入したと述べている。保育園の送迎にかかる時間を短くするという方法は、仕事にも影響を与えず、なおかつ育児に手抜きをすることもなく時間を作る方法である。保育園の送迎は、育児の中で唯一何に影響を与えることもなく省力化できるところだといえる。彼らにとっては家を購入することにおいて、保育園が近くにあるということが非常に重要な条件となるのである。

妻：今、保育園で7時半まで子供を延長保育って枠で預かってもらってるんですけど、去年までは最初、6時半までお願いしてたんですね。で、6時半までに帰れるように私もやっていたんですけど、その、職場が静岡に移転したりとかで、それまでずっと雑用係だったのに、突然仕事上で抜擢受けたりして責任が重くなったりして、それじゃ回らなくなったんですよ。で、そんなとき私の選択肢は、この人にもっと夜のお迎え代わってもらって、例えば週に1日か2日は私がお迎えいかないで、10時11時までとことん残業する日を作るか、あ、お迎えと晩御飯食べさせるのを、ベビーシッターさんをお願いして外注にするのと、それからその、子供に無理をさせる、延長保育しちゃうっていうのと、三つ選択肢があって… (ケース1)

また、妻の労働環境が変化したために、子供を6時半に迎えに行くのが困難になってしまったときのケース1の対応は「夜のお迎えを(夫に)代わってもらう」か「ベビーシッターさんをお願いして外注する」か「延長保育」という3つの方法であったと述べている。これらの方法は自分

たちが無理をして仕事の時間を削るか、お金を出して人に頼むことで子供に無理をさせるかというもので、方法はこれしかないため、どれも育児をする上での工夫であるといえるが、同時に育児の省力化の難しさを物語っているところでもある。妻は本当は週に何回か夫にお迎えを代わってもらうことを望んでいたが、このあと話し合いから喧嘩に発展し、結局仕方なく「延長保育」という子供に犠牲を強いる形になってしまった。そして「一番安易な解決方法だったけど、ベストな解決方法じゃなかった」と今でも悩んでいると述べたのである。このように、家事に関しては省力化することは容易なことであるけれども、育児の省力化はどんな工夫であれ、必ず誰かにしわ寄せがいき、誰かが犠牲となってしまう。育児と仕事との両立には、ベストな方法などないのかもしれない。

第3節 相手の家事・育児への思い

何事もそうであるが、一つの仕事を共同でする場合、みんなが同じやり方同じ考え方をしているわけではない。本研究の対象者たちも同様に、ふたりで家事・育児をやるからこそ、お互いに相手に対して気になっていることや考えていることがあるのではないだろうか。この節では、夫婦がお互いに相手の家事・育児に対して抱いている考えや、お互いの家事・育児に対する評価をみていくこととする。

(1) 夫のイライラ

「お互いに相手の家事・育児で気になっていることはありますか？」と質問したところ、全てのケースで夫は「ありません」という回答だった。家事・育児においては妻のほうが上手だし、よくやっているという意識があるのであろう。しかし、妻からは、特に育児に関して「夫が怒りすぎる」という同じ回答がいくつも返ってきた。

妻：(略)やっぱり夜がおそくて寝不足で疲れていると思うんですよ彼は。それで、子供が一あの、ぐずぐずしてるときに怒っているのは親だと誰でもあるんですけど、やっぱりそれが、すごい大きな声出して怒鳴るわけ。怒り爆発って感じで。今こういう状態みててさ、へー、こんな温和な人が、って、世間の人みんなそういつて騙されてるんだけど(笑)、私も、子供ができるまで、この人がこんなふう大声出してキレルなんて思わなかったっていうような声を出して子供をしかるようになって。で、それはやっぱり、あの一、もうちょっとこらえてほしいかな。(ケース1)

妻：うん。あのね、昔はね、昔はっていうかさくらのときまでは父ちゃんは怒らない人だった。あんまり、こう家の中で。

中略

妻：いや、だからね、やるようになったからだと思う、多分。

夫：っていうかね、負荷が桁違いだったんだよね？

妻：あはははは。

夫：それでね、やっぱりこれはしょうがないんだけど、疲れきってるからしょうがないんだけど、妻が寝てたりするから余計イライラしちゃうんだよね。本当は、最初は妻のほうが一生懸命やってて、僕が仕事に行くっていうのが大義名分としてあったから夜ぐっすり寝てた。そのことは妻にとっては苛立ちかもしれないけど、その逆に今度は妻のほうが起きられなくなったのを、俺がこっだけやってるのにずっと寝ていやがってみたいという苛立ちはあったと思いますね。

(ケース2)

ケース1、ケース2共に「子供が出来るまで、この人がこんな大声だしてキレルなんて思わなかった」「父ちゃんは怒らない人だった」と妻が述べているように、夫は子供が出来るまでは温和で

怒らない人だったけれども、子供(三つ子)が生まれてからはイライラすることが多くなり、凄く子供を怒る人になったのである。妻からすれば、それは怒りすぎと思えるほどであり、気にかかっているようだ。原因はいくつか考えられるが、後でケース1の夫が「育児って非常に不合理なんです」と述べたように、小さい子供は大人のように思い通りには動いてくれないし言うことも聞いてくれない、その上時間のコントロールも自分ではできないという、育児の不合理さがあげられる。また、ケース2の夫が「負荷が桁違いだった」と言っているように、仕事で疲れて帰ってきて家では育児といったように、仕事でのストレスから育児へのイライラが募っていったということも考えられる。そしてケース2の妻がアンケートで「それまでは育児はおいしいとこどり、家事は頼まれたことだけだったので家事育児の大変さが良く分からなかったのでしょうか」と回答してくれたように、家事・育児をやるようになって、色んなことに気がつくようになり、色んなことが分かってきたから、イライラするようになったということが考えられる。2章できっかけを見てきたときも、ケース2の夫は「長女のときから」というのに対し妻は「三つ子が生まれてから」と言ったように、「おいしいとこどり」と「やるようになってから」の違いはここにも現れているといえる。また、ここから、父親と母親のしつけ役割の違いが生まれてきたということも考えられるであろう。

(2)妻の思い

前項で見てきたように、育児に対して気になっていることは、やはり子供が相手であることから、妻は比較的夫に対して自分の思いをぶつけているようだが、家事について気になっていることでは、夫に思いをぶつせず、妻は我慢したり黙認したりする傾向がみられた。

アンケートで「玉子焼きがまずいんだけど、夫のプライドを傷つけずにどうやって美味しい作り方を教えてよいものか悩んでいる」と答えたケース1の妻は、その後「夫がやってくれているだけありがたいと思い、そのやり方に文句をつけるべきではない、と思っているので、重要なポイント以外は口を挟まないようにしている」と述べている。さらにインタビューで気になっていることを質問すると「いやもう、私がこれ以上望んだらバチが当たるでしょう。世間のほかの主婦から袋叩きにされるでしょう」と述べ、アンケートで回答してくれたような内容に関しては一言も触れなかった。同じようにケース3の妻も夫の家事で気になっていることについて次のように語る。

妻：まあ、私は昔はすごいあったけど。

A：例えばどんなことがありましたか？

妻：ん？もう、食器を洗うときに水を出しすぎるとか、(A：あ～あ。)やっぱりそういうのすごいあるんだけど、でもそれ言ったら本当に分担なんかできないから、それはまあだんだん、それぞれがやるからにはそれぞれのやり方はある程度許容しないとっていう。

A：それは、直さず今もずっとそのままですか？

中略

妻：うん、まあ、その辺は妥協しないとね。

(ケース3)

妻は夫が「食器を洗うときに水を出しすぎる」ことを気にしていたと言うが、それらを昔のこととして語る。つまり今は解決しているということだが、それは夫が直すという方法ではなく、「それぞれがやるからにはそれぞれのやり方はある程度許容しないと」「その辺は妥協しないと」と妻自身が考え方を变えること、妥協して黙認することで解決している。このように夫と家事を分担

する上では、妻は気になっていることがあっても、それが家事の内容など質的な問題である場合、お互いのやり方・考え方の違いとして許容し、夫にその思いをぶつけることなく、妥協・我慢・黙認という形で解決する傾向がみられた。そこには「夫がやってくれているというだけでありがたい」という感謝の気持ちや、「分担するためには仕方がない」という妻の気持ちが隠れている。

(3) 評価

ではここで、対象者たちが自分の家事・育児と相手の家事・育児に対してどのように感じているのかという評価をみていきたいと思う。まず、お互いに家事・育児を何%ずつ分担・共同しているかという回答をもらい、その後お互いの家事・育児を100点満点で採点してもらった。ここでは、夫婦両方のデータが揃っているケース1からケース4のデータの中から、非常に特異なデータであったケース4を除く3ケースのデータを使って分析していくこととする。

夫婦の分担の割合では、家事については夫は全てのケースで「自分30%、妻70%」と答えたのに対し妻は「夫35~40%、自分60~65%」の間に評価が集中した。育児では回答がばらつき、「自分30%、妻70%」(ケース1・夫)に対し「夫45%、自分55%」(ケース1・妻)、「自分65%、妻35%」(ケース2・夫)に対し「夫60%、自分40%」(ケース2・妻)、「自分10%、妻90%」(ケース3・夫)に対し「夫35%、妻65%」という結果になった。ケース2の育児を除く全ての場合で家事・育児共に夫は50%以下、妻は50%以上という割合で分担していることから、共働きで夫も家事・育児に積極的に取り組む家庭でも、夫婦がまったく平等に半々の割合で分担するという事はなかなかなく、実際には妻のほうがたくさん分担していることが多いのだということが分かった。ケース3は、夫婦の分担を決める際の割合について次のように語った。

妻：いや、やっぱりさっきも言ったんだけど、同じ量のことをやるにしても、私のほうが短い時間でできるから、時間が同じようになるようにすれば、私のほうが当然量は多くなりますし、あとは仕事がどっかかっていうと、夫のほうが仕事にとられる時間が長いので、まあその辺の兼ね合いで私のほうがちょっと量が多くなるかな。(ケース3)

「同じ量のことをやるにしても」妻のほうが「短い時間でできる」ことから、分担は量ではなく時間が50:50になるようにしたと述べている。さらにその時間についても、「夫のほうが仕事にとられる時間が長い」ことから、現状では半々にはなっていないようである。その結果、当然家事・育児の量は妻のほうが多くなったと語る。このように、夫が家事・育児に慣れていないことによるスピードの差と、仕事にとられる時間が夫のほうが長いということが、夫婦の分担を半々にすることを困難にしている原因だと考えられる。しかし「やっぱり居る分にはすごくやっているとと思うんだけどね」(ケース3・妻)と述べているように、家にいる時間が短いという限界はあるけれども、家にいるときにはすごくやっているということが、量を基準にしている分担の割合には反映されなかったが、努力も評価に考慮される点数には表れた結果となっている。

採点を「最低値~最高値」で紹介すると、まず、夫は自分を「家事50~70点、育児50点~80点」と採点したのに対し、妻は夫を「家事70~80点、育児80~90点」と採点した。逆に妻は自分を「家事60~80点、育児70~80点」と採点したのに対し、夫は妻を「家事80~100点、育児70~100点」と採点している。割合では半々に分担できていないという現状があっても、点数(特に妻が夫に対してする評価)は合格点といえるほどの高得点となっている。また、割合・点数両方に対して言えることだが、自分が評価したものよりも相手が自分に対して評価したもののほうが、評価が高いという傾向がみられた。このことについてケース2、ケース3に伺ったところ次のように語った。

夫：過大評価と自己の謙遜ですね(笑)。

B：あはは。ちょっと低めに書いたんですか？

夫：そうそう。多分そのくらいかな？

中略

夫：やっぱね、ほら冬物出すとか春物だすとかっていうことはほとんど俺しないじゃん。そりゃ、確かに涼子も湯名人とかや
んないけど・・・

妻：だって湯名人分かんないもん(笑)。

夫：そういうところは、その自分がこういうところはしていないできないっていうような、ある意味謙遜以外のコンプレックスみ
たいな部分が、僕は自分の点数に、自分はここまでの点数はつけられないっていうのはあったんだと思いますね。

(ケース 2)

妻：何で 90 なの？育休中のこと言ってんの？

夫：いや、ちょっと遠慮したかもしれない(笑)。

妻：そんなことはないよね！！

夫：いや、だから、さっき・・・ちょっとその、実際やってるかどうかよりも、自分のできないことがあるなって思っちゃっ
て。

(ケース 3)

「過大評価と自己の謙遜」「ちょっと遠慮したかも」と述べており、これは夫婦どちらにもいえることだが、自分の評価は謙遜から低めになり、相手に対しては過大評価するため高めの評価になるということが一つの理由と考えられる。また、「していないできないっていうような、ある意味謙遜以外のコンプレックス」「実際やってるかどうかよりも、自分のできないことがあるなって思って」と、できないものがあるということが夫にとってコンプレックスとなって、その分自分の評価が低くなっていることが分かったが、これだけ家事・育児に参加しているにもかかわらず、このような評価をしていることから、本研究の対象者の夫たちが、家事・育児をしなければならないこととして強く認識していることや、一般の男性たちとは意識が大きく違っているということが分かる。

第4節 よかったこと

これまでみてきたように、ふたりで家事・育児をするということには、様々な悩みや苦労があった。それでも彼らが「ふたりで家事・育児」という生活スタイルを続けるのは、良いこともたくさんあるからなのである。この節では、この新しい生活スタイルのメリット、ふたりでやってよかったことについて探っていく。

よかったこととして最も多くあげられたのが「良好な夫婦関係が維持されている」(ケース 1・夫)、「家族はもろくない状況が構築されること」(ケース 2・夫)、「全ての苦労や喜びを実感を持ってお互いに分かり合えるようになったこと」(ケース 2・妻)、「夫婦の会話の中で家事や育児に関する話題も多い」(ケース 3・夫)という回答で、ふたりで仕事・家事・育児と全てに関わっていることで、お互いに話題や苦労や喜びを共有することができ、それが「良好な夫婦関係」や「家族はもろくない状況」を構築していくのである。では、彼らは喧嘩をすることが少ないのだろうか。

夫：え～、最初は喧嘩はしてたね。

妻：うん。

夫：お互い口を開かなくなるっていうことも。

妻：最初っていうかやっぱり、三つ子のころだよ。あつ、でもさくらの時もあったね。子供が生まれてからですね。

中略

妻：それでやっぱり2人とも文句というか、お互い喧嘩してでも意見を交換し合って、まあ、そこそこのところに落ち着いてるんだよ。きっと今はね？ (ケース2)

夫：最初はやっぱり、まだお互い考え方の違いとかが色々あって、喧嘩になることも多かったんですけど。まあ、少ないという事はなかったと思うんだけど。でもそれがだんだん分かってきて・・・。

A：それは、家事や育児に関しても喧嘩みたいなもがあった？

夫：うん、何か結局そうなのかもしれない・・・のかな？ どうか？

中略

夫：まあ、最近は少ないんだよ。

妻：あ、最近は喧嘩しないねえ。 (ケース3)

最初のうちはお互いに色々考え方の違いもあり、色々言い合ってたたくさん喧嘩をしていたが、喧嘩して意見を交換することで徐々に分かり合い、今は喧嘩が少ない、という流れがあることが分かった。つまり、全ての話題を共有できることで最初のうちはむしろ喧嘩をすることが多いが、結果的には分かり合うことができ、喧嘩もなくなり、「家族はもろくない状況」を構築していくのである。また、何でも分かり合えることで、お互いにストレスを一人で抱え込むことがなくなり、育児ノイローゼになりにくいということも考えられる。『結婚とパートナー関係』の中で松田智子は「コミュニケーション不全や夫婦関係そのものの希薄さが、夫の「帰宅拒否症候群」や妻の「主人在宅ストレス症候群」あるいは熟年離婚につながっていく」と述べているように、夫婦が家事・育児のことで意見を交換し合い喧嘩ができるということは、夫婦関係においてとても重要なことなのである。妻が働いていてもいなくても、夫が家事・育児をしない家庭では、お互いに話題を共有することができないので、コミュニケーション不全、もしくは喧嘩を重ねても分かり合うことができないという状況に陥り、良好な夫婦関係は築きにくいものと思われる。

その他、妻が多くあげたものに「私がラク。私が仕事を続けられる」(ケース1・妻)、「私の負担が減ったこと」(ケース2・妻)、「自分に余裕ができた」(ケース6・妻)などがあつた。妻にとっては、夫が家事・育児を分担・共同してくれることは、自分が仕事を続けられる理由でもあり、自分にかかる家事・育児の負担を軽減させることでもあるので、そのことが単純に嬉しいことでありよかったことであるようだ。また、「共働きだと経済的にもそれなりに余裕があるため、旅行や外出などを楽しむことができる」(ケース3・妻)といった回答もあり、専業主婦家庭やパートタイムの妻を持つ家庭より収入が多く、生活水準が高いということもメリットにあげられる。そして最後に、ケース1の夫はこんなメリットもあると言う。

夫：いろんな意味で幅が広がったのかな一つ、自分自身のね。まあ多分、この家事育児をやらなければ、この割りとな、この近所の人とか、この保育園の人とお付き合いがあるから、社会的な幅って、広がるんですよ。多分私がそうじゃなければ、会社と自宅の往復だけだから。だからその一、マンションの中の人たちとの付き合いがあんまりなくなるだろうし、地域社会ともなかったと思う。それは広がったなあって思うのは子供がいるからだし、仕事の面でも・・・、あ、えっと、色々社会の問題とかでも、育児の立場、子供がいる立場からみるとどうかっていうようなことが、分かりますよね。・・・あの一、保育園の一管理、保育支援の育児支援が社会的に・・・とって何かっていうのは、子供がいなくて分らない話ですよ。学童保育の問題も全く、子供がいなければ関心はなかったらうしね。 (ケース1)

近所の人、マンションの人、保育園の人など地域社会とお付き合いをするようになり、「社会的生活の幅」が広がったと述べている。また、育児を取り巻く社会問題にも関心を持つようになり、夫は「会社と自宅の往復」だけの仕事人間には分らない、新しい世界を家事・育児をすることによって発見することができたといえる。夫にとって家事・育児は、色んな意味で幅を広げてくれ、新境地開拓の手段となり得るものなのである。

第5章 ジェンダー

現代日本の家事・育児事情を語る上で、性別役割分業の問題は重要な鍵となる。本研究の対象者たちは、今問い直されつつあるこの伝統的な性別役割分業を打ち破り、ふたりで働きながらふたりで家事・育児をするという、最も新しい分業の生活スタイルを持つ夫婦である。前章までは、主に彼らの実体験の語りをもとに、この新しい分業のあり方について詳しく分析してきたが、彼らが家事・育児に対してどのような考え方をしているのかということについては触れてこなかった。彼らを選んだのは、トランス・ジェンダー（＝性別越境）な生き方とも表現できるが、彼らは自分たちが選んだ生活スタイルや、伝統的な性別役割分業に対してどのような考えを持っているのだろうか。本章では、新しい分業で生活する彼らの、家事・育児に対する考え方や意識について、ジェンダー的視点から考察していくこととする。

第1節 家事・育児に対する認識

まず、この節では、本研究の対象者たちが家事・育児を自分の仕事として認識しているのか、また妻は家事・育児のために夫に会社を休ませることに対してどのような意識をもっているのかなど、特に「夫が家事・育児をすること」に関して起こりうるお互いの意識を探っていく。

(1) 家事・育児は自分の仕事

本研究の対象者たちは、性別に関係なく夫も妻も家事・育児を分担・共同しているわけだが、お互いに家事・育児は自分のすべきこと、自分の仕事として認識しているのだろうか。質問を試みたところ、言うまでもなく妻たちからは「しています」という返答が返ってきた。同じく夫たちもみな「しています」という返答だったが、その一方で次のように語った。

夫：多分義務感にまで、なってるんじゃないですか。それがないと、多分私はあんまりやらないんじゃないですかね。義務だといわないと。

A：楽しんでやってるもの、っていうのはほとんどないですか？

夫：やりたくてやってる、って意識はないなあ・・・。(ケース1)

夫：義務だからね。義務だよ、家事なんて。

妻：そうか、義務なのか・・・。

夫：親としての義務だよ。

妻：そだね。

夫：保育園に連れて行けるほうが、お迎えもそうだけど、行けるほうが行くっていうのが義務だよ。(妻：うん。)帰りが遅いほうに保育園に迎えに行ってもらるのは義務じゃないですもんね、やれる人間がやるっていうのが義務っていう感じ。僕のほうは早く帰ってくるんだから、僕が迎えに行くのが義務って言うか自然っていうか。家事育児って多分、自然にそうい

ケース 1 もケース 2 も夫は、家事・育児をすることを自分の「義務」だと述べている。このことから、本研究の対象者の夫たちが、家事・育児を自分のすべきこと以上に、自分がやらなければならないこととして強く認識していることが分かる。また、この「義務」は「やれる人間がやる」ことだと述べ、全てを妻に押し付ける形となっている日本の性別役割の現状に対して批判的な考えを示している。夫たちはみな、家事・育児は生きていく上で必要な仕事であり、夫とか妻である以前に親としてやらなければならない当然の「義務」だと認識しており、一般的に家庭の中で妻が家事・育児に対して抱いている意識と同じ考え方を持っているのだということがいえる。この点で、彼らが一般の日本男性の意識とは大きく違うことが分かる。しかし、「義務」という言葉からも分かるように、彼らは決して職業より家庭を第一に考えるマイホーム型だから、好き好んで家事・育児をしているというわけではないのである。前にも述べたとおり、彼らはみんな仕事に熱心に取り組んでいる人たちばかりで、忙しい時間を割いて家事・育児をしている。「やりたくてやってる、って意識はないなあ」と述べていることから、彼らが家事・育児を逃げることのできないものと感じており、やりたくないからやらなくていい、妻に任せておけばいいというものではないと考えていることが分かる。彼らにとって家事・育児とは、やりたくなくてもやらなければならない「義務」なのである。

そうは言うものの、多少なりとも夫は「妻のやるべきことを手伝っているという感覚」や、妻は「自分のべきことを夫に手伝ってもらっている感覚」があるのではないかと思いきさらに問いかけてみた。

妻：いや！！

A：それはない？

中略

妻：いや、そういう・・・単に労働の総量が減ったという意味でしかないです。

中略

A：じゃあ逆に、ご主人も、妻の仕事を手伝っているんだという感覚もない？

夫：それはそうですね。ないですね。うん、できるほうがやるっていうだけの話ですね。

(ケース 2)

夫が家事・育児をしてよかったことに「私の負担が減ったこと」と回答したケース 2 の妻は、それは「単に労働の総量が減ったという意味」でしかなく、自分のべきことを夫にやってもらっているという感覚はないという。同時に夫も、「できるほうがやっているだけ」と述べ、妻のやるべきことを自分が手伝っているという感覚はないという。一般的には、よく家事・育児をしている夫でも、多くは手伝うという域からは抜け出せず、どこかに妻が主体という意識があるものだが、彼らは、完全にお互いが家事・育児の主体となって生活していることが分かる。特にケース 2 の夫は育休経験者でもあり、現在でも育児に関しては夫のほうが多く関わっているということから、その意識が強いものと思われる。

しかし、対象者の中で一番若いケース 3 は次のように語る。

夫：いや、ないですよお～。

A：まったくないですか？

夫：うん。

妻：ふふふふふふ。

夫：あはは。

A：ありや？何かちょっとありそうな予感・・・。

夫：いいや～。

妻：ない？ないか？

夫：ないよお～。

妻：でも最初のうちはあったでしょ？

夫：いや、ない。

妻：あ、そお～？

A：奥様はちょっとあったんですか？

妻：やっぱりね、今はないと思うけど、最初のうちとかは、そのほうがうまくいったかなって感じがちょっと。本音では、二人とも働いているんだから、家事を分担するのは当たり前、そうじゃないと生活なんかしていけないっていうのが本音なんだけど、その本音をいきなりぶつけたら、多分ね、反発もあるだろうからと思って、まあ、表面的には「お願い」っていう感じでやってたかな。

(ケース3)

妻のやるべきことを手伝っているという感覚は「ない」ときっぱり言う夫に対して、妻は「最初のうちは、そのほうがうまくいったかな」と、夫に手伝ってもらっているという感覚が少しあったと語る。ふたりで家事・育児という生活がまだそれほど長くはないケース3では、初めの頃の家事・育児に対する夫婦の意識の違いが会話の中に表れているようにみえるが、中でも妻は、本音と建前の間での葛藤があるようである。「本音では、二人とも働いているんだから、家事を分担するのは当たり前」と思っているんだけど、「表面的にはお願い」という感じでやっていたという。それは夫の反発を回避しての行動だと述べているが、3章のきっかけのところでも妻が夫に家事・育児を教え込むということがあったが、やはり初めのうちは、妻が一步上に立って意図的に家事・育児をする夫にさせているという背景があるので、意識の中でも、夫は気づかない妻の考えというものがあるのであろう。ただ、「今はないと思うけど」と述べているように、その感覚は徐々に消えていくことが分かる。つまり、夫婦がお互いに家事・育児の主体となっていたケース2も、おそらく初めの頃は、妻の中に「お願い」という感覚があったのではないかと考えられる。

(2) 夫が仕事を休むこと

子供が病気になったときなど、一次的に保育園からの連絡を受けるのは妻である場合が多いため、夫は妻からの連絡を受けて、お互いに話し合いをした上でどちらかが会社を休むことになる。もちろん、夫が自発的に自分の都合をつけて休むということもあるが、話し合いで決めるにしろ、一般的には家事・育児のために夫が会社を休むことなどほとんどない出来事であるため、このことに対して、対象者の妻たちはどう考えているのだろうか。「どっちが休む？」という話を夫に持ちかけること自体、気が引けてしまうということはないのだろうか。

妻：あははは。全然、全く。

A：最初から全然？

妻：どうなんだろうね？その辺は私あんまり印象にないんだけど。

A：頼んでっていう形ではないってことですかねえ？

中略

夫：それは、頼まれたからではないですね。子供のために仕事を休むっていうのは、父親として驕る内容ではないよね。

妻：私も、別に頼むことでもないと思うし。あるけど、どお？みたいに、話し合いで決めてるよね今は。

(ケース 2)

「全然、全く」と笑いながら妻は言う。前項でもみてきたように、ケース 2 はすでに夫婦がお互いに家事・育児の主体となっており、家事・育児のために夫が休むこと自体「父親として驕る内容ではない」と述べているように、日常の中の当然の出来事ではないのである。だから、質問そのものがとても単純なことに思えおかしかったのであろう。また、会社を休むこと自体「頼むこと」でも「頼まれたからやること」でもないとして述べており、夫が家事・育児をすることに対するふたりの意識の高さが伺える。

妻：う～ん、まあ言いやすいことではないけど・・・っていうのは、やっぱり仕事が凄く忙しいので、休ませると、翌日とか休日にしわ寄せが来るので、私のほうが今はやっぱり仕事に関しては自由が利くから。

(ケース 3)

逆に、ケース 3 では夫が仕事を休むことに対して「言いやすいことではない」と妻は述べている。しかしその理由は、相手が夫だから、男の人に会社を休んでまで家事・育児をさせるのは気が引けるというものではなく、「(夫は)仕事が凄く忙しいので、休ませると、翌日とか休日にしわ寄せが来るので」と述べているように、ジェンダーの意識とは全く関係なく、ただ純粹に翌日や休日にしわ寄せがいくのが嫌だからという理由である。

このように、本研究の対象者たちは家事・育児に対して、男も女も性別に関係なく一人の人間として関わるものだという、ジェンダーフリーな意識が非常に強い人たちであるということがいえる。

第 2 節 別の生活スタイルの選択

彼らは今、夫婦で仕事も家事・育児もという新しい生活スタイルで生きているわけだが、もし、今とは違う生活スタイルを選択していたらどうなっていたのだろうか。また、次にもし選べるなら、今と同じ生き方を選ぶのだろうか。この節では、このような仮想の生き方をしていた場合の彼らの意見を聞くことで、彼らが伝統的な性別役割分業やジェンダーに対してどのような考えを持っているのかということを探っていきたい。

(1) 妻が専業主婦だったら

まずは、もし妻が専業主婦だったら、夫は家事・育児に関わっていただろうかということについて語ってもらった。

夫：っと、一つの仮定として彼女が専業主婦、彼女が彼女のまま専業主婦でありうるかってなると多分あり得なかったって思ってるから、第一に質問が成り立つかどうかっていうのは難しいですね。あの専業主婦になっていたら多分彼女もたなかっただろうし、うーん。家庭の中にずっといること自体できなかっただろうから。私も、専業主婦になって欲しいと思ったこともないんですよ。だからその設問が成り立つかどうかかわからないですが、仮にそうであったとしたら、たぶんね、私はね、ほとんどやらなかったんじゃないかと思う。

A：やらなかったと思う？

夫：もともとぐーたらな方ですし、うん。しないですむならなにもしないし。自分が子供と接して、自分が楽しんでるであろう範囲内だけでやってるという感じだと思いますね。

(ケース 1)

妻：くっ。やらないよね～？

夫：多分やらないですね。

妻：やらないよ～。

夫：多分残業に走るでしょうね。

妻：う～んうん。

夫：やっぱりその妻が今の収入があるから、その収入を続けるためには、職場にいろいろな状況を作るべきじゃないからやってる。逆にもしやめちゃったら、その収入は全部ゼロになるから、その分僕が残業をしてそこを補うから、当然家事育児は僕はまずほぼやらないでしょうね。(略)だから僕も、妻が専業主婦だったら、まあ育児のおいしいところどりくらいはするだろうけども、まあ帰ってきてご飯はできて当然だとか、ゴロンとしちゃっても別に当然とか、そういう風には思っちゃったりもするかもしれないですね。

(ケース 2)

夫：う～ん、いや、それは・・・、したいけど、でも専業主婦だとねえ。

妻：想像できないでしょ(笑)。

中略

夫：専業主婦・・・、いやいや、やって欲しいと思うならやるかもしれないけど、やって欲しいと思うかね？専業主婦の人って。ちょっと考えられないね。

夫：専業主婦だったら？だからもし、その奈津子が専業主婦だったら、きっとその主婦という職業に専念するんだろうから、あんまり・・・

妻：ふふふ、入り込む隙がなさそうだよね。

夫：あんまり。だから、こっちは趣味で料理とかさせてもらうときはあるかもしれないけど、(A：ああ。)忙しかったら別にやんなくても・・・。

(ケース 3)

まず、ケース 1 とケース 3 の「質問が成り立つかどうかというのは難しい」「想像できない」という言葉からも分かるように、夫婦で家事・育児をする前提条件として、「妻が働いていること」というのが強くあるので、たとえ仮想の世界であっても、妻が専業主婦であるという状況を考えられないという事実があるようだ。それでも、さらにお願ひして考えてもらったところ、全てのケースにおいてしないだろうという回答があった。しかし、その理由は様々で、「もともとゲーたらなほう」「しないですむならなにもしない」「(妻の収入の分まで)僕が残業して補う」「(家事・育児に)入り込む隙がなさそう」というものであった。特にケース 1 の夫の「しないですむならなにもしない」やケース 2 の夫の「帰ってきてご飯はできて当然だとか、ゴロンとしちゃっても別に当然」と思うという語りは、一般の専業主婦を妻に持つ夫たちが考えていることと変わりはなく、決して彼らが仕事人間や専業主婦を否定的に捉えているわけではないことが分かる。ただ、それが男だからとか女だからとかいう理由であれば彼らはそれを否定するであろう。彼らの場合やらなければならない状況がそこにあったので、前節でも述べたようにそれが義務感となり、関わったというだけで、その状況がなければ「自分が楽しんでるであろう範囲内だけでやってる」「育児のおいしいところどりくらいはする」「趣味で料理とかさせてもらう」という程度の関わり方であっただろうという、意外にも一般の多くの男性の現状と同じ状況を想像して語ってくれた。

(2) 夫が仕事人間だったら

では逆に、夫が全く家事・育児をしない仕事人間だったら、妻はどうしていたのかということについて語ってもらった。妻たちは専業主婦になろうと思ったであろうか。

妻：でもね、三つ子が生まれたときにそれだったら私やっぱり愛は冷めますね。

A：ははははは。

夫：でもね、離婚してもやってけないないよねきつとね。

妻：いやあ、実家にかえるとかさ。

夫：う～ん。離婚？

妻：うん。

A：専業主婦になろうという思いにはならなかった？そうだとしても。

妻：うん。私仕事をやめるっていう選択肢はずっとないんですよね。私の中には。(ケース 2)

妻：それはありえない。っていうか家事育児全然しないような人だったら結婚していないと思う、私は。

A：わ～、今までのインタビューでも大体そういう答えなんです。離婚しますとか(笑)。ありえないですか？

妻：うん、ありえないです。

A：もし結婚していたとしても離婚を考えるとしますか？

妻：う～ん、まあ、一生の不覚と思って離婚するしかないね(笑)。

A：最初から知っていたら、もう結婚しない？

妻：うん、それは間違いないです。(ケース 3)

「仕事をやめるという選択肢はずっとないんです」、「それはありえない」など、妻たちもまた、自分が専業主婦であることはあり得ないと語る。さらに、もし夫が仕事人間だったら、「離婚」や最初から「結婚しない」という厳しい意見を述べている。夫たちが、妻が専業主婦であったら自分が仕事人間であることを選ぶと前項で述べたのに対し、妻たちは夫が仕事人間であっても自分が専業主婦になることは決して選ばず、自分が働き続けられるであろう別の選択—離婚や結婚しないこと—をするのである。ケース 1 の妻もまた、自分が専業主婦であることを「不可能」だと言い、次のように語る。

妻：彼が、長時間家をあけるっていうことに、負担が、私のほうばかりに偏ってるっていうのに不満で、いっそのこと彼をリストラしようかと思ったことが、正直ありますけど。(A：はい。)なんかね、どんなに大変でも、お互いにわかちあってる、支えあってるっていう感覚があれば、我慢できるんですよ。(A：ああ～。)でも自分だけが、貧乏くじを引いてるって状態に、気分になったときに、我慢できないと思う。(ケース 1)

「負担が私のほうばかりに偏ってる」状態を「貧乏くじを引いている状態」と語る彼女は、夫を「リストラしようかと思ったこと」があるとも述べており、昨年から夫の仕事が忙しくなって、妻への負担が大きくなりつつあるケース 1 の妻は、仮想の話の中だけでなく現実にも、夫のリストラ＝離婚を考えた経験があるという。そして、「どんなに大変でも、お互いにわかちあってる、支えあってるっていう感覚があれば、我慢できる」と述べ、自分が働くことを前提として、それがどんなに大変でも自分だけが貧乏くじを引いている状態よりは我慢できると語っている。

このように、夫たちにとって働かない妻はいらないという選択肢はないが、妻たちにとっては、家事・育児をしない夫はいらないという考えがあることが分かった。ここには、妻たちの働きたいという社会的自立への思いと、それを肯定し応援する夫たちの思いが表れているが、夫から働かない妻とは離婚という思いが出てこなかったことから、本研究の対象者のような新しい分業スタイルでは、妻が働いていることという前提条件の上に、さらに絶対に働き続ける、専業主婦ではありえないという妻の強い思いが作用していると考えられる。この妻たちの働きたいという強

い意志が、次項の質問に対する妻たちの語りですらに明らかになる。

(3)別の生活スタイルを選ぶなら

最後に、お互いに家事・育児のメリットもデメリットも知った上で、次にもし選べるとするなら、あなたはどんな生活スタイルを選びますかという質問を試してみたところ、夫たちは揃って、大変なこともあるけど今と同じ事を選ぶでしょうと回答した。ただしそれには、妻がフルタイムで働いているということが大前提になっている。それに対して、ケース3を除く妻たちからは、次のような興味深い同じ内容の返答が返ってきた。

妻：いやー、なんか、子供がいなくて、自分に専業主婦のお嫁さんがいるっていう生活には憧れますよねー……。

中略

妻：パラサイトシングル。そう、パラサイトシングルの女の人は、結婚したら絶対損するから、しようと思ってないんです。

だって帰ると、お母さんがお風呂沸かしてくる晩御飯用意されてるから、思いっきり仕事できるし、家はあるし、給料は全部自分のお小遣いに使えるし。結婚したら生活水準下がるわけじゃないですか。 (ケース1)

妻：私結構仕事人間あこがれるな(笑)。心置きなく仕事ができたらいいなあと思うことは多いんですけどね。

夫：僕もね、職場でもキャリア系の女性のほうが好きですね。職場の華みたいなそういうのは何か僕はピッとお前ら要らないよみたいにしたいたいタイプだから。うん、キャリア系が好きですね、僕はやっぱり。

B：ふ〜ん。

妻：でもそれって、ほら一步間違えると家庭をかえりみない働き方になっちゃうから。

夫：だから、そこは自分で線引きしてよ。

妻：あはは。だから、線引きしなくても働ける環境、家庭をかえりみないで働けたらいいなあと思うことはある。 (ケース2)

「子供がいなくて、自分に専業主婦のお嫁さんがいるっていう生活」、「パラサイトシングル」、「仕事人間」、「心置きなく仕事ができたらいいな」、「家庭をかえりみないで働けたらいいな」など、彼女たちから出てくる言葉は全て、自分が心置きなく、何を気にすることもなく働ける環境、子供を持たないという選択である。しかし、彼女たちはそういう選択を「する」とは述べず「憧れる」と述べていることから、それが選択不可能なものであると認識しており、今の自分の生活スタイルを現実として意識し受け止めた上で、その正反対に位置する生き方に不可能であるからこそ憧れを感じていると考えられる。夫たちが、このように「憧れ」を示さず、現実と同じ生き方を選択すると答えた裏には、夫たちにとっては妻の言うような、家庭をかえりみず心置きなく働く仕事人間という選択が、選択不可能なものではなく、むしろ現代日本ではもっとも選択しやすいものであり、自分たちはそれに反発することで新しい生活スタイルを生み出してきたので、今の生き方を最も支持するのだという思いがあると考えられる。また、中には心置きなく働きたいと思っている夫もいたのかもしれないが、それを口にしてしまうと、夫の場合「憧れ」というただの妄想の話では片付かなくなってしまうこともあり得るので、そういう理由から言えなかったということもあったのかもしれない。しかし、どちらにしても、妻の極めて強い仕事への熱意、働きたいという熱い思いが、全ての根底にあり、全てを左右する要因になっていることは間違いない。そしてそこには「僕もね、職場でキャリア系の女性のほうが好きですね」と述べているように、夫の中にも、妻に対して自分に依存して生きていく女性ではなく、人生の共同生活者として、対等の人格を持った自立した女性であることを願う気持ちがあり、それが後押しとなっているということもいえるであろう。

第3節 家事・育児への向き不向き

一般的には、外で働くのは男の役目、内で家事・育児をするのは女の役目であるとする性別役割分業が、現代日本ではいまだ根強く残っており、あたかもそれが性別による向き不向きで決まっているのだと思われがちである。女性の社会進出が進むにつれて、外で働くことに対する向き不向きは問い直されつつあるが、家事・育児に対する向き不向きはまだ大多数の人が性別によると信じて疑わない。また「父性」や「母性」といった言葉を耳にすることがあるが、これも性別による向き不向きによって、親の中に存在する指向要素が二つに分類されてできたものであるが、「三歳までは母の手で」という三歳児神話が崩壊しつつあるように、これらの男として女として、また父親として母親としての性役割はもう一度問い直してみる必要がある。そこで、この節では、これらの性役割に依拠しないジェンダーを越境した生活をしている本研究の対象者たちに、実際に男も女も家事・育児を経験するなかで、これらへの向き不向きが、性別の違いによるものだと感じるかどうかを、実体験をもとに語ってもらうことにより、性役割や向き不向きについてここでもう一度考えてみることにする。

(1) 性別によらない

対象者に、家事・育児への向き不向きが性別によるものだと感じるかどうかを聞いてみたところ、意見は2つに分かれた。一つは性別の違いを感じたことがないという意見で、もう一つはもしかすると性別の違いもあるのかもしれないという意見である。ここでは、まず前者の性別によらないという意見について分析していく。

夫：うん、向き不向き、というのと性別とは関係ないと思う。

A：関係ないと思いますか。

夫：それは関係ないと思いますよ。どうしても自分で産む経験はしていないから、産んだことによる何かそういう精神的な感
覚的なものがあるのかどうかはわからないけども、物理的に作業として、向き不向きはないと思うな。

中略

夫：ま、個人差、個人的資質というのはあるのかどうかっていったら、一定の経験をやれば、大体できるんだろうと思いますよ。あとはその人が、生活する、育った環境によって子供の頃はどうかだったっていう差はあるんだと思うんだけど、個人差はそんな一定の水準までだったらそんな出てこないと思いますよね。

中略

妻：んーとー、なんか母性神話みたいのがあるじゃないですか。うん、私にはなんかねー、母乳の出が悪かったせいなのかもしれないんですけど、あんまり自分自身「母性」って感じないんですよね。(略)そう、だから、えーと・・・子供と一緒にいて、楽しい、可愛いと思えるようになったのは、この子が、あの一、口をきくように、コミュニケーションとれるようになってからで。で、ただ泣いてるだけの赤ちゃんのときは、子どものそばにいるのがつらかったんで。で、私の母性ってどこにあるのかなっていう、やっぱり私はどっか人間としておかしいんじゃないかと、けっこうそれで悩んだときもあったんですけど。(略)すごい切実に私が感じるの、あの一、子供に対して、親が愛情を抱けるのは、手をかけて世話をするなかで、だんだんその一、インタラクティブにコミュニケーションがとれるようになってから情は湧いてくるんで、世話をしない子供は自分が産んでようと他人が産んでようと、自分が世話してもない子供に愛情なんか抱けるわけがないと思うんですよ。だから、父親も一、育児しない父親は、生物学的にオスだと証明しただけで、親じゃないですよ、と思う。この人が一、子供、娘のことをすごい可愛がるのも、自分もおむつをかえ、夜泣きのときもあやし、でミルクを飲ませ、ごはんを食べさせ、公園に連れて行って遊ばせ、しつけをしてきて、手をかけて、体に触れて世話をしたから、自分の子供だとおもって慈しむことができるんであって、それは男女を問わないと思う。(ケース1)

ケース1の夫は、家事・育児への向き不向きは、「性別とは関係ないと思う」と述べ、さらに個人の資質による差はあるかということに対しても「一定の経験をやれば、大体できる」と述べている。つまり、家事・育児の向き不向きには性別による差も、性別とは関係なく個人としての差もないと感じているのである。家事・育児そのものが、大変なものではあるけれども、一つ一つの作業自体は意外と単純なものが多く、それほど技術を要するものでないため、これまでもみてきたように、最初のうちは「慣れ」が足りないことから夫のほうが質的に低いということはあるけれども、一定の経験を経ることで大半の作業は誰でもできるようになるので、結局は性別による差も個人差もないと考えられる。しかし、これらを夫は「物理的に作業として」と限定し「どうしても自分で産む経験はしていないから、産んだことによる何かそういう精神的な感覚的なものがあるのかどうかはわからない」と述べている。確かに、生物学的に「産む」という経験は女性にしかできないので、物理的な作業とは別に、そのことによる精神的な違いはあるのかもしれないが、それに対して妻は「あんまり自分自身母性って感じない」と言う。妻は娘を帝王切開で出産し、母乳もでなかったため、子供が「ただ泣いているだけの赤ちゃんのときは、子供のそばにるのがつらかった」と言い、子供が可愛いと思えるようになったのは「コミュニケーションがとれるようになってから」だと語っているように、女性であり自らが子供を産んでいても、その子供に対して母性を感じないという経験をしている。子を育てるという意味において、母乳の出なかった妻は、物理的にも夫との差はなく、そのことが精神的な差をもなくしたのだということも考えられるが、最近、児童虐待などが問題になっているように、例えば自分がおなかを痛めて産み、母乳をあげて育てた子であっても、その子に対して愛情を抱けない場合もあるし、また逆に、養子や代理母出産のように、例えば自分が産んだ子でなくても、その子に対して自分の産んだ子以上に愛情を持てる事だってある。妻は「子供に対して、親が愛情を抱けるのは、手をかけて世話をする」からであって「自分が世話してもない子供に愛情なんか抱けるわけがない」と切実な思いを語ってくれたが、このことから、子供に対する精神的な差は、子供を産んだことによって生じる性別の差ではなくて、どれだけ手をかけて世話をしたかということによって生じるものであって、例えば父親・母親であっても手をかけて育てなければ、それは生物学的にオス・メスと証明しただけで「親ではない」のである。したがって、父親であっても手をかけ世話をし子供を育てたなら、その子に対して愛情を抱くことができ、オスではなく「親」であり得るのである。「男女を問わない」と妻が述べているように、精神的な差もまた、性別による違いではないといえる。

(2) 性別によるのかもしれない

では次に、ケース1とは反対に、家事・育児への向き不向きは、もしかすると性別によるのかもしれないという意見を述べたケース2・ケース3の語りをもとに分析していく。ここでは夫婦がお互いに話し合い、会話の中で結論を作っていくというやりとりがなされたため、少し長いがその会話の様子を中略することなく紹介する。

夫：個人の性質かな。

妻：う～ん。うちは割りと、向き不向きっていうか得意なこととかも男らしい女らしいなんだよね。割りとそうなんだよね。

A：はあ、はあ。例えば？

妻：だから、機械関係は旦那で・・・

夫：仕事が結局妻は保育士じゃないですか。だから子供の栄養とかそういうのも知ってるわけですよ。で僕はメーカーの勤務で、工場だから機械系っていうかちょっとした電気系っていうのは僕がやるから、まあたまたまそういう分野が詳しくあったりするから。例えば湯名人の水路が詰まったりするのは、ここが詰まってるんじゃないかとかそういう憶測立てるも

の僕のほうが得意だし。

妻：そうそうそうそう。

夫：だから、男女というより職業柄っていったらアレかね？職業柄なのかもしれない。

妻：でもほら、あなたは男の人が多い職場で、私なんかは女の人が多い職場だし。だから、多分あるというか、分かんないけどね、ただのジェンダーなのかもしれないしね。分かんないけど・・・。

夫：例えば、それまでの生き方みたいなものがベースですね、男とか女とかじゃなくて、仕事柄とか、例えば僕はバイクが好きだったからたまたま自転車のパンク修理もできるとかね。

A：あ～あ。

妻：でも、聞いてみると、ご主人のほうが結構家事が細かいとかっていう話もきくから、まあやっぱり個人の違いなんだろうけどね。

(ケース 2)

まず、ケース 2 では「うちは割りと、向き不向きっていうか得意なこととかも男らしい女らしいなんだよね」と述べている。このケース 2 は、3 章で見てきたように、家事・育児分担が、唯一時間ではなくお互いの好き嫌いや向き不向きによって決まってきたというケースである。そしてその向き不向きによって決められた分担が、男らしい女らしいに一致していることから、家事・育児への向き不向きが性別の違いによるのではないかと考えている。特に 3 章の出来ない家事のところで、妻は「メカ的なこと」ができないと答えていたが、ここでもそのことを取り上げて語っている。家事・育児に夫が参加していない家庭でも、「メカ的なこと」は夫が得意であることが多く、学生生活の中でも、理系や機械系の学部には、男性のほうが多いということも確かな事実であるので、家事・育児の中でも「メカ的なこと」に関しては性別による向き不向きがあるとも考えられる。しかし、夫が不得意とする料理については、コックさんや板前という職業に男性が就いていることも非常に多く、男だから向いていないとは言い切れない。夫がこれらの差を性別の差ではなく、「職業柄」によると述べているのに対して、妻は「あなたは男の人が多い職場で、私は女の人が多い職場」だと述べ、やはり性別の差があるのではないかと主張しているが、今までの考察からして、これらはどちらも正しいといえる。「メカ的なこと」に関しては性別により向き不向きがあるけれども、その他のことに関しては「職業柄」など個人的資質により向き不向きがあるということであろう。特に、分担が好き嫌いによって決まっているケース 2 に限定して考えれば、自分の苦手な家事・育児については担当することがほとんどないため、「慣れ」は比較的生じにくく、苦手なものはいつまでも不向きなままであると考えられることから、それが性別による向き不向きへと発展していったのだと考えられる。ただ、妻が最後に「ご主人のほうが結構家事が細かいとかって話もきくから、まあやっぱり個人の違いなんだろうけどね」と述べているように、ケース 2 に限定せず全体として捉えた場合には、家事・育児への向き不向きは、性別ではなく個人的な差だといえる。

では、ケース 3 の語りからも、向き不向きについて分析してみよう。

妻：それは、難しいね。育児と仕事は、私はあんまり性別は関係ない個人の性質だと思うんだけど、家事っていうのは、範囲が結構広げようと思えばいくらでも広がるし、狭めようと思えばいくらでも狭められるものだから、広く浅く要領よく合理的にっていうのは、もしかしたら女の人の方がうまくやれるのかなっていう気はしてる。

A：あ～、やってみてそう感じる？

妻：うん。

A：ご主人はどう思われますか？

夫：うん、そうだね。だから、その、家事一個一個に関してはより丹念にやったりとかもできるんだけど、全体のバランスは、

例えば買い物は全然任せてるっていうところとかで、一週間の献立がこういうバランスになって、で、それをいつ、どのくらい買い物することでやっていくという、その流れはやっぱり難しいよ。何か難しいかな。その辺がね、それはあるかもしれない。一個一個はまあ。そういう家事っていうのはそういうことかもしれない。

妻：やりくりみたいなのはね。

A：それは性別の違いも多少あるんじゃないかみたいな感じますか？

夫：どうなんだろうね？でも・・・

妻：よく、女の人はテレビを見ながらつめを切れるけど、男の人はそれはできないとかっていうのがあるじゃないですか、雑誌を読みながら電話できるのは女の人だとか。そういうのを聞いたことがあって、その、たくさんのことを、一定の時間で優先順位を決めながら調理をこなしていくとか。お金にしても家事にしても、やりくりをするっていうのは、女の人のほうがそういう能力が高いのかなっていうのは、なんとなく。

A：感じていること？

妻：う～ん。

夫：あれだよな？その育児っていうのは少なくとも、男女の役割が違うでしょ？

妻：そうだね。それはそうかな。父親と母親だからね。

夫：その、父親としての育児っていうのは、まあ育児っていうか教育も含めれば何か色々あって、きつともしかしたら、その家事とか仕事とかにもそういうのってあるんじゃないかな。

妻：うん、そうかもしれないね。

夫：うん、だからその、全般的に家事はどっちとか育児はどっちとかっていうか、なんかその向き不向きの何かがあるんじゃないかな？

A：ああ、じゃあ、向き不向き自体が性別の違いだとは思わないけれども、多少なりともそういう性質はそれぞれにあるんじゃないかっていう事ですか？

夫：あるんじゃないかな。

妻：うん、そうだよね。その家事全般がどっちに向いてるとか、どっちに向いてないとかじゃなくて。 (ケース 3)

ケース 3 では、仕事と育児については「あんまり性別は関係ない個人の性質だと思う」と述べているが、家事については範囲を広げようと思えばいくらでも広げられるものであるがゆえに「広く浅く要領よく合理的にっていうのは、もしかしたら女の人の方がうまくやれるのかなっていう気はしてる」と妻が述べ、さらに夫は実体験から「家事一個一個に関してはより丹念にやったりとかもできるんだけど、全体のバランスは、例えば買い物は全然任せてるっていうところとかで、一週間の献立がこういうバランスになって、で、それをいつ、どのくらい買い物することでやっていくという、その流れはやっぱり難しいよ。何か難しいかな」と付け加えている。つまり、やりくりなど一定の時間の中で優先順位を決めながらこなしていかなければならないようなことに関しては、女性のほうが向いていて、男性は生物学的な違いからそれらのことに関しては向いていないということが考えられる。3 章でも、妻は家事において「効率」を重視するが、夫は「成果」を重視する傾向があると述べたが、ケース 3 のこの語りは、この結果にぴったりと一致する。また、ホックシールド (Hochschild.A) はアメリカで行った研究の結果、「妻は洗濯物をたたみながら買い物リストを考えたり、幼い子供から目を離さないようにしながら掃除機をかけたりと、一度に二つ以上の家事をこなしているが、夫は夕食を作るか、あるいは子供を公園に連れて行くかのどちらか一つに専念している場合が多い」という特徴をあげており、このことから、ケース 3 の夫婦に限らず、すべてにおいてこのようなやりくりや効率に関しては、男女の違いが存在するということが考えられる。したがって、ケース 2 の場合もそうであるが、家事全般や育児全般に対して性別による向き不向きがあるのではなくて、それより下位に存在する個々の

家事・育児について、個人的な向き不向きに加え、性別による向き不向きも存在するのだということがいえる。

しかし、このことにはもう一つの側面があることも忘れてはいけない。山田昌弘によれば「家事・育児の大変さは、炊事、洗濯、掃除、世話といった個々の作業自体にあるのではなく、実際の作業の上位のレベルに存在する管理や監視といったメンタル的側面にある」という。つまり、ケース3のこのような冷蔵庫の中をチェックしながら買い物リストを作り、献立を立てたり、家計を管理したりということは、個々の作業よりもレベルが高く難しいことなのである。したがって、これらが出来ようになるためには、広く家事が見えるようになることが必要であり、それにはより一層の「経験」と「慣れ」が必要となってくる。つまり、家事・育児において夫が妻のレベルにまで達するには、子供の頃からの教育の差もあるので、相当な時間を要すると思われる。多くの場合、夫が家事・育児に参加していても、妻と同レベルにまで達していることは少なく、そのことが男女の違いとして向き不向きとなって表れたという側面もあるのではないだろうか。だとすれば、ケース3の場合も、夫が経験を重ねて家事・育児にもっと慣れることで、やりくりや効率の面での男女の差はなくなっていくものと推測される。

おわりに

最近では「男も家事・育児を！」と叫ばれることが多くなり、日常の中でも頻繁に「男の家事・育児」という言葉を目にしたたり耳にするようになった。しかし、それらは一歩間違えると、「男の家事・育児」が強調され過ぎるあまり、あたかも「男も家事・育児をしなければならない」のだと警告されているかのように受け取ってしまいがちである。実際に、私自身そのように思っていたからこそ、男の家事・育児に興味を持ち研究テーマに選んだのである。しかし、本研究で新しい試みとして、これまで見落とされがちであった妻の視点も組み入れることによって、夫が家事・育児をするということにおいて、様々な場面で妻から受ける影響が非常に大きいということが分かったと共に、夫が家事・育児をするということよりも、夫婦がふたりで家事・育児をするということに意味があるのだという大きな発見をすることができた。そしてこの発見を通して、彼らが我々に伝えようとしているのは、「男も家事・育児をしなければならない」ということではなく、「男も家事・育児をすることができるんだよ」ということなのだということに気付いたのである。ここでは、これまでの分析結果をふまえつつ、新しい分業のあり方についてまとめると共に、彼らが我々に伝えようとしていることの真意に迫っていきたいと思う。

まず、ふたりでする家事・育児では、一般的には夫はほとんどすることのない、子供のオムツの取替えや、ミルクをあげるなどの負担の重い家事・育児も夫婦で分担・共同しており、その他、慣れるまではなかなか気付きにくいと、大抵は妻がやってしまうような細かい家事などにも夫は気付いてやっている。このことから明らかに本研究の夫たちが一般の男性よりも家事・育児をやっている、「手伝う」ではなく「分担・共同している」というに等しいレベルのものであるということが確認できる。しかし、実際には、夫婦が半々で分担・共同しているのかというところではなく、夫の方が仕事に取られる時間が長いことから家事・育児に費やせる時間が短いということや、家事・育児に慣れていないため遂行スピードが遅いことなどにより、妻のほうが割合としては少し多めに分担している場合が多いということが分かった。ただ、夫たちは時間が短くても、家にいる間はとてよく家事・育児をしていて、そのため、たとえ分担が半分ではなくても妻は夫の家事・育児を高く評価した。それに対し夫は、自分がまだまだ妻ほど家事・育児を分

担できていないことにコンプレックスを感じ、一般の男性に比べてこれほど家事・育児に参加しているにもかかわらず、自分を低く評価した。このことは、夫たちがどれほど、家事・育児を自分のやらなければならないこととして認識しているかを表しているといえよう。新しい分業スタイルでは、夫婦がお互いに家事・育児の主体となり、お互いに親としての義務感まで感じながら家事・育児に取り組んでいるのである。

また、新しい分業スタイルで生活している夫婦には、妻がフルタイムワーカーであり、応分の収入を得ていることと、夫が長時間労働であるが比較的時間に融通の利く仕事についていることという大きく分けて二つの特徴があった。分析を進めていくにつれて、この二つの特徴が、本研究の大きな鍵をにぎる二つの柱であることが分かってきた。

まず、妻がフルタイムワーカーであることについて考えていく。夫が家事・育児をするようになったきっかけでは、多くの場合夫と妻の間で意見が異なっていた。家事・育児に対する夫と妻の意識レベルの差が、初期の時期では大きいということが原因だと考えられたが、特に気になったのが、妻が夫に意図的に家事・育児を仕込むことによって、きっかけを作り出しているという側面である。なぜ妻がこのような行動をとったのかというと、それは妻たちの中に、自分が働かないという選択肢は全く存在しないからである。5章でも見てきたように、本研究の妻たちは、働くことに対して非常に強い熱意を持っていて、その情熱は、家事・育児をしない夫とは離婚、できるものなら子供もいなくて心置きなく仕事のできる環境のもとで思う存分仕事をしてみたい、と思うほどなのである。このことから、ふたりで家事・育児をするというこの新しい分業スタイルのキーポイントは、女性＝妻が働くことに対して固い意志を持ち、まずは女性＝妻が先に、性別役割分業の壁を打ち破り、これまで男の人の役割だとされていた社会に出て、フルタイムで働くことで社会的に自立し、男性＝夫と対等の立場に立つことが重要である。これがクリアされて初めて、次の次元として男性＝夫が家事・育児に参入してくるかどうかという選択肢が表出してくるのである。逆に、男性＝夫が先に家事・育児に参入し、そのことによって女性＝妻に社会に出ることを促すというパターンはほとんどあり得ないと考えられる。ケース2の夫は「夫に家事・育児をやらせたいのであったら、責任範囲として妻も収入責任を負いなさい。収入責任を負わないのに、家事・育児責任を夫には要求するっていうのは、夫には家事・育児・収入の三つを要求しといて、妻は家事・育児の二つっていうのは、それは僕は不公平だと思ってるから」（ケース2・夫）と語っており、夫は仕事で疲れているうえに、自分から進んで家事・育児をしようなんてほとんどの場合考えられないといえる。さらに妻が専業主婦の場合にはなおさらそうである。したがって、ふたりで家事・育児をするという分業スタイルを築くためには、生きるうえで夫が家事・育児をしてくれなければ生活が回っていかないという状況がないと、忙しい日本男性はなかなか家事・育児に参入しにくいということがいえる。つまり、日本男性は仕事を持っているということが自明のこととなっているため、男性から先に家庭へ参入するというパターンがほとんどないのだと考えられる。さらに社会の流れからみても、女性の社会進出が進むことに一歩遅れて、男性の家事・育児参加が進んできたように、女性に変化したことから始まる、この社会全体の一連のプロセスと同じことが、今個々の家庭においても起こっていると捉えることができる。本研究の妻たちは「子育て」と共に「家事・育児をする父親育て」もしているのである。

では次に、夫が長時間労働であるが比較的時間に融通の利く仕事についているということについて考えていくが、これには4章でみてきたようにもう一つの側面が存在していた。それは、夫たちが家事・育児のために時間を作り出しているということであった。現代日本では、男性の労働時間は非常に長く、本研究の夫たちもまたその例外ではない。男も女も利用できる育児休業法はあるけれども、実際にはあまり強く作用していないのが現実である。それでも彼らが家事・育

児をできるのは、まだまだ性別役割分業観が強い中で、周囲の理解を得るために様々な努力を重ね、仕事と家事・育児の両立のために時間を作り出しているからなのである。私が本研究を始めるに当たって、家事・育児をする父親の条件として、制度を利用した者と限定していたが、その考えは間違いだったのである。制度を利用するよりもっと過酷な状況のなかでも、手伝いの域を超えて家事・育児に参加している父親は、たくさんいたのである。しかし、現代日本で仕事と家事・育児を両立させることは容易なことではなく、新しい分業スタイルでは家事・育児と仕事との兼ね合いが最も大きな問題となっている。実際に彼らも、「仕事との両立上体力的にも時間的にもしんどくなってきている」と切実な思いを語り、転職などを考えたりもしたが「社会の体質が変わらなければどこにいても同じだ」と頭を抱えて悩んでいる。それなら、性別役割分業に倣ってもっと楽な生き方をすればいいのではと思うが、彼らはこの先も現状維持の生活、または妻の負担を減らすため、もっと自分が関わるようにしたいと望み、この生活スタイルを決して変えようとはしない。それはなぜかという、大変なこともある分、この新しい分業スタイルにしかないメリットがあるからである。夫婦がともに仕事も家事も育児も共同することで、お互いが常に対等な立場であることができる。その上、すべての話題について分かり合うことができ、本当に全てを共有することができる。これまでのように、仕事と家事・育児に分かれている場合お互いの大変さを分かり合うことができず、一步間違うと、それは男の過労死や女の育児ノイローゼに発展しかねなかった。しかし、新しい分業スタイルにはこのような不安がないのである。さらに、彼らには二人分の収入があり、一般家庭よりも生活水準が高い。彼らの家事・育児には、機械化や外注など出費も多く、一見するとそれらは手を抜いているとか、生活レベルを下げているとみられがちであるが、そうではなく、彼らは彼らなりに生活レベルを保ったまま、違う新しいやり方を発見しただけなのである。収入の多い彼らにとっては、これが最も合ったやり方だといえる。また、共働きだと、子供にとって悪影響を及ぼすのではないかということもよく指摘されるが、彼らは子供と一緒に居られる時間が短い分、その時間をとても大切に、むしろ子供との関わりが密になっているということに加え、妻だけでなく夫も積極的に子供と関わっているため、子供は父親と母親の愛情を両方平等に受けることができるので、むしろ子供への影響は良いものだといえる。

これらのことをトータルとして捉えると、彼らのような新しい分業のスタイルは「夫が外で働き、妻が家事・育児に専念する」という、しばらく続いてきた生活スタイルとは様々な点で異なっているが、それで直ちに、夫は仕事にしわ寄せし、妻は家事・育児に手抜きをしているという、家族の欠損や機能不全としてみるのは間違っているといえる。これまでの歴史の中で、様々な社会変動が家族のあり方を変化させ、一昔前には性別役割分業というその時代に合った家族の形態や役割が生まれてきたように、今また少し社会が変動し、女性の社会進出などの動きの中で、今の社会状況に最も合った生活スタイルとして、家事・育児の夫婦共同責任という新しい分業の形が、必然的に生み出されたのである。そしてこれらが、現在において最も新しい夫婦の生活スタイルであるからこそ、特別なものとして頻繁に取り上げられ、完全に社会が変動する前の移行期において存在するから、社会に残留する体質との間で問題が生じているのである。したがって、社会の体質が完全に、女性の社会進出と男性の家庭参入を当然とするものへと移行すれば、この新しい分業スタイルは、世の中で最も理想的なライフスタイルになるであろう。

ただ、最後に私が言いたいこと、そして本研究の対象者たちが我々に提示したかったことは、この新しい分業スタイルを全ての人に強制したいということではないということを理解して欲しい。これまでどおり、性別役割の生活でうまくいっている人たちに「男も家事・育児をしなければならない」などと言うつもりもないし、夫が専業主夫になるという分業のあり方ももちろんあって

良いと思っている。重要なのは、夫婦がお互いに、「強いられる」ことなく「納得」して生活スタイルを築けるということである。そのためには、現在のように誰かが我慢しなければならないような社会ではなく、自分たちで納得して、一番合った生活スタイルを「選ぶ」ことのできる社会であって欲しいということなのである。

謝辞

本論文を完成させるに当たって、再三にわたり根気強く私を支え、助力を与えてくださったたくさんの方々に謝辞を述べて、本論文の締めくくりとしたいと思います。

至らない私を、終始親身になって優しくご指導くださった主査の池岡義孝先生、お忙しい中快く副査を引き受けてくださった村上公子先生、なかなか対象者が集まらず、困っていた時、ご多忙の中何度も間に入って対象者を紹介してくださった育時連の松田正樹さん、東京大学の木村吉博さん、インタビューに慣れない私に手取り足取り教えてくださり、インタビュー当日もビデオ係や助手として同行してくださった永田夏来さん、同じくインタビューに同行してくださった松木洋人さん、奥井朋子さん、皆様のサポートなしにはこの論文を完成させることはできませんでした。本当に、心より感謝いたします。

そして何より、お忙しい中貴重な時間を割いて、ご自宅でのインタビューを快諾してくださり、私の未熟なインタビューにも真摯に答えてくださった6人のインタビュー対象者の方々に心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

引用・参考文献

- 男も女も育児時間を！連絡会編 1995 『育児で会社を休むような男たち』 ユック社
- 男も女も育児時間を！連絡会 家事プロジェクト著 2003 『男は忙しいから家事できない??』
- 柏木恵子編 1993 『父親の発達心理学－父性の現在とその周辺－』 川島書店
- 福岡・女性と職業研究会編 1982 『家事・育児を分担する男たち』 現代書館
- Hochschild, Arlie 1989 *The Second Shift: Working Parents and the Revolution at Home*, Viking Penguin. (田
中和子訳 1990 『セカンド・シフト－アメリカ共働き革命のいま』 朝日出版社)
- 山田昌弘 1994 『近代家族のゆくえ－家族と愛情のパラドックス』 新曜社
- 善積京子編 2000 『結婚とパートナー関係－問い直される夫婦－』 ミネルヴァ書房

参考ウェブサイト

いくじれんホームページ (<http://www.egg.org/>)